

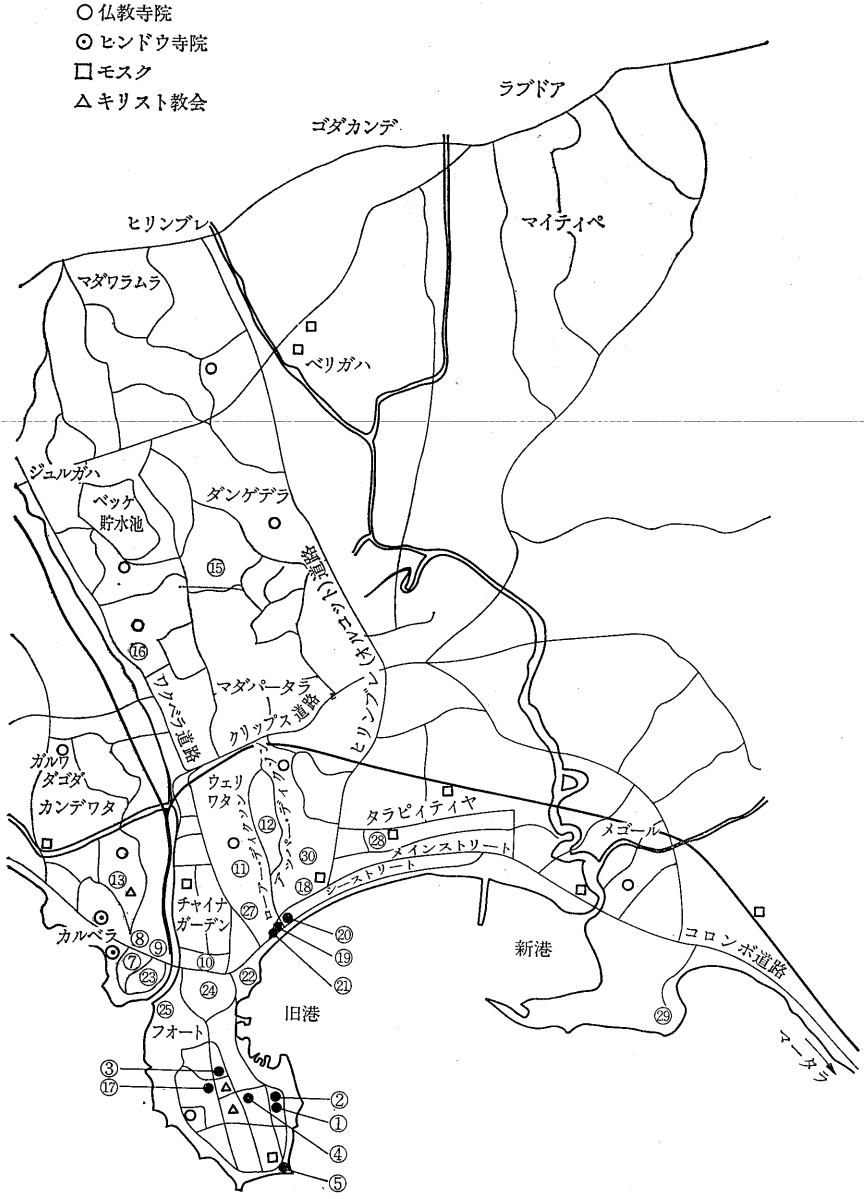
ゴール (Galle) スリランカ一地方商業都市の肖像イメージ (一)

——都市誌の試み——

友 杉 孝

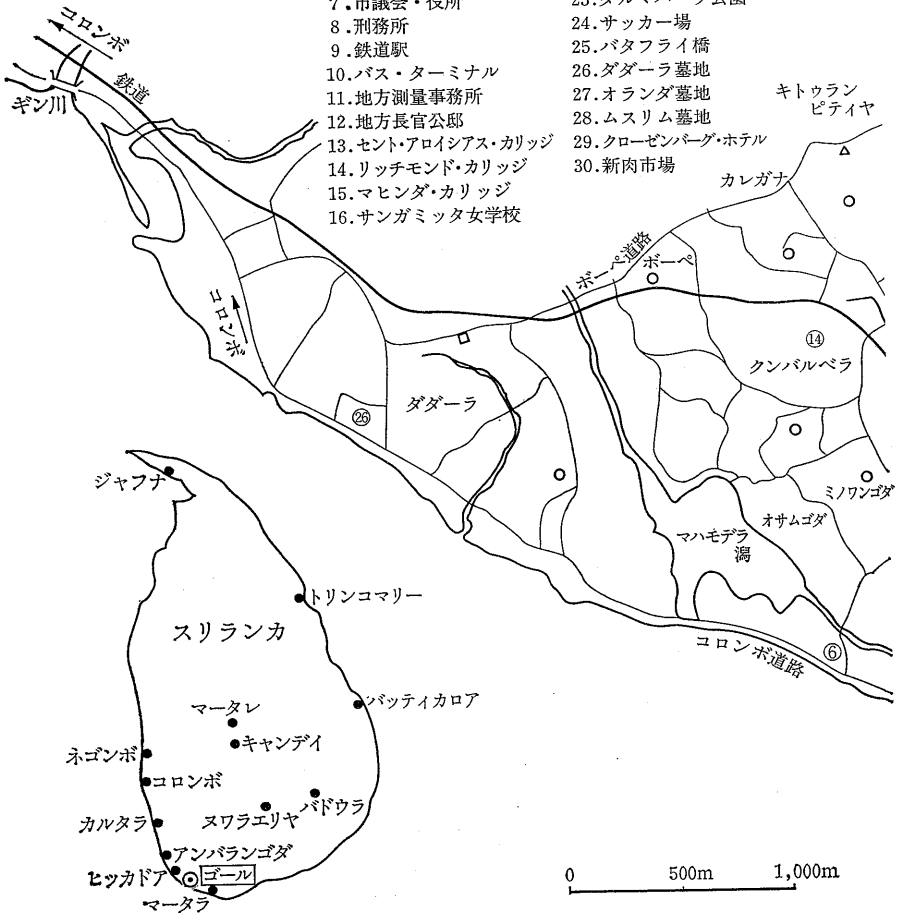
- 一、ゴールまで 本号
間奏曲
- 二、街のかたち 本号
- 三、商いのさまざま 次号
- 四、商人の系譜 次号
- 五、祭りと商人
- 六、祭りの後で
- 七、エピソード
ノスタルジア再考
あるいは
ナショナリズムの空洞化をめぐって

ゴール (Galle) スリランカ一地方商業都市の肖像 (一)



- 仏教寺院
- ◎ ヒンドウ寺院
- モスク
- △ キリスト教会

- | | |
|---------------------|------------------|
| 1. 地方役場 | 17. サウスランド女学校 |
| 2. 地方裁判所 | 18. 旧市場 |
| 3. ニュー・オリエンタル・ホテル | 19. 新市場 |
| 4. ウォーカー・アンド・サンズ | 20. 魚市場 |
| 5. 燈台 | 21. 肉市場 |
| 6. ゴール病院 | 22. 週市場 |
| 7. 市議会・役所 | 23. ダルマパーラ公園 |
| 8. 刑務所 | 24. サッカー場 |
| 9. 鉄道駅 | 25. バタフライ橋 |
| 10. バス・ターミナル | 26. ダダラ墓地 |
| 11. 地方測量事務所 | 27. オランダ墓地 |
| 12. 地方長官公邸 | 28. ムスリム墓地 |
| 13. セント・アロイシウス・カリッジ | 29. クローゼンバーグ・ホテル |
| 14. リッチモンド・カリッジ | 30. 新肉市場 |
| 15. マヒンダ・カリッジ | |
| 16. サンガミッタ女学校 | |



ゴール都市図

出所：Town Map of Galle by Survey Department Sri Lanka, 1978による。

一、ゴールまで

一九八三年八月より十月まで、東南アジア地方都市の比較という研究計画の一部として、私はスリランカの都市を旅行していた。次年度に行う本調査のための調査予定地を選定するためにである。首都コロンボ (Colomb) を出発して、中央高地のキャンデイ (Kandy) 、ヌワラエリヤ (Nuwara Eliya) 、マータレ (Matale) 、東海岸のトリコンマリー (Trincomalee) 、バッティカローラ (Batticaloa) 、西海岸のネゴンボ (Negombo) 、南部海岸のゴール、マータラ (Matara) である。北部海岸への旅行も、当然、予定していたが、民族問題によって治安が悪化し、社会調査は出来ないと判断して、取止めた。八三年七月に歴史的な都市大暴動がコロンボ、その他の都市で発生し、商店街が焼き打ちされ、多くのタミル人が殺害された。暴動直後の旅行でもあったので、コロンボその他の都市で大変ささまじい焼け跡を何回も目撃した。立ち並ぶ商店街の一区画が瓦礫の散乱と化している。建物の外壁だけが残り、ほかは屋根も何も失くなっている光景。異様としか言えない現代の廢墟である。

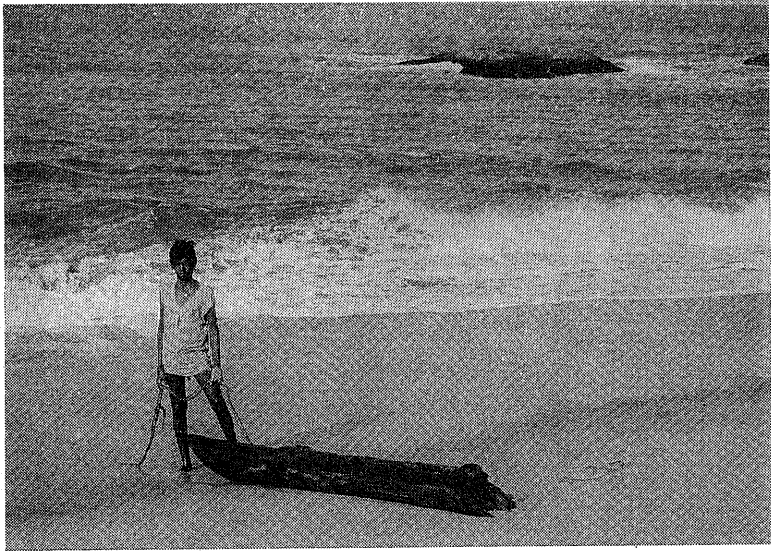
旅行中、私は、東海岸、中央高地、西海岸の景観がそれぞれまったく異なるのに驚いた。スリランカは日本の北海道より少し小さい島であるのに、地域的多样性が大変豊かであった。青く明るく澄んだ空の下、近くに遠くに連なる山波を望みながら、茶プランテーション地域をつづらの山道を下りてゆく。とても小さな島国とは思えない雄大な山岳風景である。折々に製茶工場の三、四階の大きな建物が現われ、粗末なブラック長屋を見かける。プランテーションで働くインド・タミル人の住居である。イギリス時代に南インドから移住してきた。道路わきにヒन्दoo寺院が立



中央高地の展望。山腹はイギリス統治以来の茶プランテーション。しかし一部のプランテーションは都市向けの野菜栽培に変わっている。低地には集落が発達している。

地することもある。山の尾根近くには仏塔を望見する。しかし道路を歩いていて、出会う人はごく少ない。急に土地の傾斜が緩やかになる。ここからは焼畑 (Chena) 地域である。うっそうと茂る林間は昼も静まりかえって、何か不気味でさえある。どこからか樹木を燃やす匂いがただよってくる。山賊が出没する噂ももつともだ、という気分になる。緩傾斜地の全国土に対する比率が非常に高いスリランカでは、焼畑耕作は伝統的に重要な農民的耕地拡大の方式であった。谷間の小規模な水田と焼畑の組み合わせで生計が立てられた。人口増加も焼畑地域に吸収された。林間を一気に駆けぬけるように過ぎると、たちまちぱっと視野が広がる。太陽の光がまぶしい。海岸と丘陵の間に横たわる湿地帯に開かれた水田である。集落は丘陵の麓の樹林の中に立地する。家の周辺にはバナナ、パイヤ、マンゴー、椰子などが乱雑に植えられている。海岸近くでは、現在でも潟が多い。イギリス植民地時代、排水して、潟を水田に変える事業が各地で行

なわれていた。米の低い自給率を高めるためである。多くのインド米が輸入されていた。やがて海岸で、丈の高い椰子の木々があちこちに見えてくる。インド洋のなんともいえない美しい深い藍色の海はすぐ近くのはずである。道路は海岸線に平行して走り、港都市に収斂してゆく。行き交う車の数も人の数もいつのまにか多くなった。都市である。これらの地方諸都市を巡ぐり、各都市がそれぞれもつ独自の雰囲気を感じ銘を受けて、私は旅行の最後にゴールを訪れた。すでに十月であった。コロンボからゴールまでの道路は西海岸に沿ってほぼ真南に下がる。約七二マイル。カルタラ (Kattara) で大きな河を越えると、すぐ左手に巨大な仏塔を見上げる。この地を通過するほとんどすべての人々は道路わきの菩提樹に小銭を喜捨し、合掌する。バスでは、車掌が乗客から喜捨を集め、小走りで菩提樹に捧げてくる。昔々からの慣習である。ここから南部が始まる境界の地であると、強く印象づけられる。海岸に沿う道路から、時折、美しい海岸風景が見渡せる。インド洋の押し寄せる波、遠くの椰子が茂る岬、ちかくの墓地。十字架の墓はカトリックを示す。ポルトガル時代以来、海岸地域、とくに漁民の間にはカトリックが広く普及している。漁民の粗末な草ぶきの土間の家々が塊まり、近くに教会が所在する。小さな入江の浜には何艘もの漁舟が打ち並べられ、漁網を干している光景も見られる。外人観光客目当ての新しい建物も見える。ホテル、バンガローである。しかし折角の新しい建物も、民族問題の激化で観光客は大幅に減り、大変閑散としていて、何だか侘びしい雰囲気につつまれている。しかしなんとといっても、海の色のはりばりは格別である。近年、ヨーロッパ、とくに西ドイツなど北ヨーロッパからの観光客が一度は増加した。たしかに、寒い北ヨーロッパからみれば、このきらきらする太陽の下での美しい海辺は、まさに生命あふれる土地であろう。人々は浜辺にこしらえた日陰で肌を焼く。出発後、約三時間たらずで、ゴール郡 (Galle District) に入る。アハンガマ (Ahangama) とある。



西海岸の風景。 朝陽を浴びて流木を拾う少年の姿は、あるいは家計のたしにするための労働かもしれないが、旅行者の眼にはとても感動的な「自然と人間が戯れる」光景である。

アハンガマは海岸に接する交通の要地で、シナモンの集散地として栄えた。町の東側を迂回するバイパスを離れて、海岸沿いの旧道を歩くと、商店街である。戦前の古い家並みが残り、汚れた漆喰が時の経過を印象づける。Royal Tailors とか Bata とかの看板がかかる。四辻の大きな家はシナモン商人の旧宿泊所であろうか、現在は扉はすべて閉められている。扉の前の日陰で十人ほどの女が果物を揚げ、通りかかる客を待ちながらお喋りに興じる。シナモンがこの地域の経済に与えた影響はまことに大きく。現在でもシナモン栽培の一つの中心地である。内陸部に行けば、昔ながらのシナモンの精製過程を見ることが出来る。薄暗い室内で二、三人がナイフで器用にシナモンの皮剥ぎをし、選別する作業を見てみると、東西にわたった香料貿易の拡がり、その深さを実感する。オランダのスリランカ支配もシナモンの確保が一つの主要な目的であった。

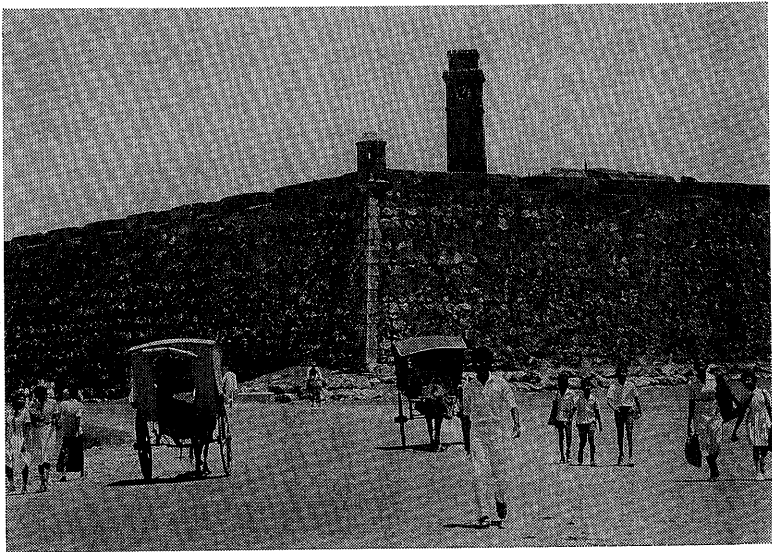
町はずれで旧道はバイパスに合流し、南に向う。右手



アハンガマ旧道。車が高速で走るバイパスに較べて、ここにはよどみながら流れる異なる時があるよう。人々はゆっくりと道を歩く。子供達も安心して歩いている。

は美しい海岸、左手はとても大きな潟である。水草が繁茂し、遙か向こうの木々の茂みまで集落は見当らない。やがて道路わきに商店が現われるとヒッカダア (Hikkadua) である。近年急速に観光化が進み、海岸に面してホテル、バンガローがやたらと建ち並ぶ。ヒッピー風の人々の溜りになったり、薬物の使用が問題になったりする。浜に塊まる漁民の家々とホテルとの際立った対比は印象的である。モーター・ボートで海上を一周する観光客相手の商売も現われた。気が付いてみると、泳いだり、肌を焼いているのは観光客だけであった。

ヒッカダアのバンガローの並びを過ぎ、移り変わる明るい海岸風景の中を南下してギン川 (Gin Ganga) を越えるとゴール市 (Galle Municipality) である。ギン川はゴール市の境界である。この川とコロンボ道路が交差する地点に立地する集落がギントタ (Gintota) で、ゴール市内に属する。Tota は河川交通の要衝で、人間と物資が集散する土地を意味する。かつて内陸道路網が未発達



フォート城壁。この城壁の向側にフォートの街がある。確固とした意志によって隔離された場である。手前の道路は、かつて深い堀と湿地であった。時計塔は一九世紀末に建設された。

の時代、内陸のバッテガマ (Baddegama) から舟で産物がギントタに輸送されていたのである。商人、旅芸人も往来した。現在はムスリムの大きな集落が所在し、国営の大きなベニヤ工場も立地する。ギントタを過ぎ、ダダーラ (Dadalla) の広い共同墓地を左に見て進むと、外国人観光客相手のお土産店が並ぶ前を過ぎて、ゴールのバス・ターミナルに着く。いつも相当な人で賑わっている。

ゴールではまず、海に突き出たフォート (Fort) がすぐに目につく。近づく、圧倒的な石の量感が迫る。オランダはスリランカ海岸部になんか所もフォートを建設し、現在でも地方役場 (Katcheri)、刑務所に使われる⁽¹⁾。ゴールのフォートはスリランカ最大規模で、ゴールの歴史を物語る。私はフォート中央部の小高い土地に立地するホテルに宿泊した。一八六五年建設で、ホテルの建物それ自身がアンティークの趣きをもつ。強烈な光りに満ちた青い空にきれいに似合うコロニア

ル・スタイルで、建物全体が白のモルタル塗りである。すばらしく天井が高い。ラウンジにはオランダ風の古いがりしりした家具、すてきな織物が懸けられていて、とても楽しい。廊下の壁には古いエッチングが飾られる。道路に面したベランダに古い大型の椅子がいくつもあり、道路向うの城壁を越えてくる海風が心地よい。夕方、私は城壁を一周する。現在、城壁の上は格好の散歩道となっていて、多くの人々がお喋りしながら夕暮れの一刻を楽しむ。興味あることに、この土地の高校生の喧嘩口論の決着は、当事者が城壁で対決して決められるそうである。城壁が特別な意味を持つからであろう。城壁から見るとフォートの街は、白いモルタル壁が夕日に映えて紅色に染まり、城壁の下で、どすんどすと寄せ返す濃さを増した海の暗さと、一刻の対照を構成する。

これまで私はタイ農村の社会調査を長期にわたって行なってきたが、スリランカはほとんど初めてである。数年前、キャンディのペラヘラ（行列）祭りと仏教遺跡巡りに、一〇日間ほど遊びにきただけであった。農村調査にずっと関わってきた私が都市研究に足を踏み入れたのは、おおまかにいって、自分のタイ社会研究を対象化したいという個人的な事情が強く働いていた。しかし同時に、つぎのような二、三の一般的な事情もある。第一に、農村研究の成果を無媒介にすぐに国家レベルに短絡してしまう傾向に対する反省。国家の中にあるすべての農村社会を単純に集計しても、けして国家像は形成されない。国家は農村社会とは明らかに異なるレベルにある。どうしても都市の媒介が必要である。以前、私はタイ農村と都市の関係性を論じたことがあるが、都市そのものの研究は未着手であった。第二に、東南アジア都市の研究蓄積がまだ大変乏しいことも触れねばならない。農村研究も乏しいが、都市研究はさらに乏しい。たんにヨーロッパ中世あるいは近代都市とは異なると消極的に述べても、東南アジア都市の特徴を積極的にとらえる記述にはならない。しかも現代世界はどこであれ、都市がかつてないほど大きな力をもって社会を変えつつある。都

市それ自身の膨張もすさまじいかぎりである。都市を除いて、全体社会を論じることは決定的に不可能となった。第三に、都市研究の方法の多様化がある。これまで、都市社会学、都市社会史、都市地理学、都市工学など、多くの学問分野で都市研究が行なわれ、多くの貴重な蓄積がなされてきた。しかし現代都市における都市の圧倒的な比重増大につれて、現実が学問よりずっと前に行ってしまった、と受け取られる状況も現われつつある。農村においても都市化といわれる現象は顕著であり、都市の風俗はたちまちに全体社会を席捲してしまう。けして農村から都市への動きではない。このような状況に対して、そもそも、人間にとって都市とは何かと、改めて問われ現代の中心的な論題の一つとなっている。都市を記号論の視点から論述する試みも新しい興味ある成果をあげつつある。今後とも、現代都市を論述する有効な方法、あるいは枠組が問われ続けるであろう。当然、この研究は学際的である。学際的とは複数の研究者の論文の寄せ集めでなく、一人の研究者の視点が複眼的であることをいう。いうまでもなくこの視点は、現代諸学問の成果を自分の中に内面化した感性による。さらに付け加えれば、人文地理学についてである。本来的に地理学とは土地に関する記述を意味する。具体的な知識と訓練した感性の結び付きによる記述である。この記述はおのずから社会の全体像を指向していた。記述は現代では不人気な研究分野ではあるが、人文地理学の記述は本来的に学際的であるほかはありえないであろう。ともあれ、都市の一部分の研究が十分に都市全体像を論述することになるうるし、人々が生きて経験する都市を学問の言葉で表現することが志向される。

このような都市に対する関心から、私はスリランカの地方都市を巡り歩いて、結局、ゴールを調査地に決めた。決定の消極的理由は、東海岸のトリンコマリ、パッティカロアは、民族問題の非常に深刻化で社会調査が困難になりつつあったこと。実際、八四年には事態は極度に悪化していた。積極的理由は、ゴールがポルトガルの占領あるいは

それ以前からの交易都市の歴史をもち、時間の経過を物語る魅力に富む都市だからである。王権所在地であったキャンディから遠く隔たり、交易活動がゴール形成のおもな原動力であった。キャンディは一つの歴史の代表であるが、ゴールはもう一つの歴史を代表する。植民地化の経験もスリランカの一つの伝統を形成する。さらに、地方都市一般に関わることだが、人間の背丈で測れそうな都市の規模がある。このような規模の都市で、時間の経過とともに磨かれた文化の洗練を私が好むこともつづくわねばならない。巨大都市とは明確に相異なる文化の洗練である。

この魅力的な都市を商業活動の視点からアプローチできないか、と私は考えた。この都市には多様な商業形態、すなわち、外国貿易から行商までが共存し、それぞれが動態的に変化し、変化の過程には歴史が刻み込まれてきた。これらの商業活動にとりなつて都市が形成された。言い換えれば商業活動の特定のものへの対象化、あるいは沈殿化が都市の建造物、交通路網であり、さらには景観一般にも投影している⁽³⁾。したがって、現在の商業活動の分析と都市観察から都市景観の中に書かれたゴールの発展過程、すなわち生きられた過去を商業活動の視点から読み取る作業も可能となるであろう。都市景観は意味が充滿するテキストであり、そこから多義的な意味を読みとる作業が都市を視ることにはかならない。目的合理的な経済性のレベルだけでなく、結果として表現される言語化されていない感性のレベルまで解読されなければ、都市の全体像を記述することは困難であろう。書かれざる、いわば都市の神話を具体的に構成する作業が必須である。いうまでもなく、ここでは商業活動をたんなる合理的経済活動の機能的な一分肢としてとらえるだけでは不十分で、むしろ社会的コミュニケーションの一形態として定義される。商品は「もの」として、経済的効用とともに、特定の社会的意味づけを担う⁽⁴⁾。すなわち、特定のメッセージを担うメディアとして機能する。さらに小稿では、技術を媒介として社会的コミュニケーションを行う職人、プロフェSSIONナルをも深く関説したい。

社会分業の拡大過程で、職人の商人化がみられるし、医師、弁護士が持つ商人的側面にも注目せねばならない。商業によって社会はその外部から活力を導入し、一定の歴史的條件のもとで、社会統合は強化され、あるいは混乱させられる。

このような商業が果たす一つの機能は、社会における祭りを思い出させる。社会を超越する存在を祀る祭りは、時の経過につれて緩みがちな社会統合を改めて強化するが、祭りにとりまなう乱痴気騒ぎは高揚した気分となって、秩序破壊にも向う。歴史上、祭りと叛乱は大変関係深い。⁽⁵⁾「社会を超越する」を「社会の外部」と変えれば、祭りと商業の間の著しい類似は明らかである。商業活動の展開は社会を活性化するが、同時に解体の契機でもあった。実際、祭りは最高の商いの場で、商店も他所からの巡回商人も賑々しく忙しい。祭りの日を大売出しにする事例も多い。大売出しをフェスティバルと名づけることも周知である。日常生活においても市場で商いが活発に行われる雰囲気は非常に祭りに似る。厳格な形式性と開放的な活気が共存し、状況によって両者のどちらかが支配的となる。商いの場は、独特の雰囲気と取引きのパフォーマンスによって、一つの世界を指向する。市場を通過することで、「もの」は社会的意味を変える。祭りを経過して、社会の雰囲気がからりと変ることに似る。商業は祭りに類似するだけでなく、深く結びつき、不可分といつてよい。このような商業の多義的性格を、小稿では商品の系譜として記述したい。すなわち、社会的身分を顕示する貴金属を純粹商品、いわばメタ商品として位置づけて、メタ商品と社会的身分を消去する生鮮食料品とが取結ぶ関係性のもとに商品世界の秩序が構成される。⁽⁶⁾

八四年の調査は、九月より約五ヶ月間ゴールに滞在して進めた。フォート時計台のすぐ近く、医師の家に下宿した。医師はフォートの外部、カルベラ (Kalwella) に診療所 (Dispensary) をもち、とても繁盛していて評判がよい。ゴ

ール農村出身で、現在でも出身地に約四十エーカーの茶のプランテーションと立派な家屋を所有して、管理人を置く。三人の兄弟は政府高官、一人は高級技術官僚、もう一人も高級技術者でアメリカに在住する。調査の際、私の身元が尋ねられる場合、この医師の家に下宿していると答えると、相手はすぐにわかったという気分になるらしい。おかげで私はうさんくさい外国人でなくなる。医師の家庭語は英語で、シンハラ語ではない。母国語より英語が堪能であることも社会が経験した一つの歴史である。この家を訪れる友人達もすべて英語で話合う。夜、夕食に招かれた人々が歓談するのにも私も招ばれ、スリランカのこと、日本のことなどを語りながら、何人もの知合いをもつことができた。この家に下宿することで、私はゴールの裕福な人々の生活を垣間見た。夕方、手入れのよい庭に面したベランダで椅子に寄りかかりながら、海からの風を楽しんだ。道路を隔てて向こうに見える城壁には散歩を楽しむ人々が右に左に行き交いながら、だんだんと人数がふえ、暗闇も濃くなってゆく。

ゴールでの私の社会調査は、まず、当地のインフォーマントに手伝ってもらい、用意した簡単な質問表を手にして、商店街の店舗を一軒一軒訪ねて聞き取りすることであった。公営市場のすべての売り場と公設週市でも聞き取りした。何人かの商人についてはより立ち入った面接で、商いの現況をうかがった。商人からの聞き取りが一通り終わってから、毎日、質問表なしで購買者の聞き取りをした。購買者との面接で商人の話を確かめ、さらに商品購入に関する理解を深めた。面接すべき購買者は上層階級から下層階級まで広く求めた。街のあちこちに購買者の家を訪ねることで、私はゴールの土地に馴染んでいった。社会階層、カーストをより身近かに感じるようになった。週末はゴール周辺の農村にゆき、週市で聞き取りした。都市と、農村の間を往来して、両者の間の関係性については私は考え込んだ。

八六年一月に約一月ゴールを再訪する機会を得た。前回の調査で得た知見、知合いを手がかりに、一人の商人を選

び、彼の家族の系譜を再構成する作業に集中した。四代ないし五代にわたる家系図は、同一祖先から多くの家族が分出することをしめし、これら家族の現況は実に多様である。まさにゴールが生きて経験した歴史を家族のレベルで表現している記録であると言ってよい。系譜を再構成することで都市景観、商業活動に人間的イメージを与えることが出来よう。

問 奏 曲

ゴールはスリランカ西海岸の最南部、北緯六度という赤道のごく近くに位置する。南西方向に開いた湾岸は、北東モンsoonに対して、自然の都合な港湾条件である。歴史上、ゴールが登場するのも港としてであった。一三四四年、大旅行家イブン・バトウタはムスリムの船をみたことを報告している⁽⁷⁾。一六〇五年、ポルトガル船が難破して、この地に漂流したのが、ヨーロッパ人に知られるきっかけであった。一五九二年、イギリス船も漂流している。一五九四年、ポルトガルは物資置場を設け、一六二五年、サンタ・クルズ(Santa Cruz)砲台を建設して、フォートの陸側に深い溝渠を掘った。ゴール・フォートの出発であり、以後、三百年を越えて、ずっとヨーロッパ植民地勢力の拠点となる。ポルトガルの影響は、ローマ・カトリックの普及、ドミンゴなどポルトガル姓の継承として現在に残る。一六四〇年、オランダはフォートを包囲し、激戦のすえ、ポルトガルを破って、フォートを領有した。以後、一五〇間年のオランダ支配が続く。オランダ風の都市建設が行なわれ、多くのバーガー(Burger)すなわちオランダ系スリランカ人も生れた。プロテスタントのあるていどの普及もみた。オランダはゴールを軍事的に強化して、一六六三年

巨大な城壁で周りをぐるりと囲み、深い溝渠を築いて、現在のフォートを建設した。城壁内の面積は約三五ヘクタールで、スリランカ最大である。黒人奴隷を使役して、大きな褐色花崗岩砂岩を積上げた。ゴールはスリランカにおけるオランダ最大の軍事的根拠地となった。ここを基地にオランダ商業活動が行なわれ、ムスリム商人はオランダ商人とシンハラ農民社会の間を媒介した。しかし、一七九六年、オランダはイギリスに無血でゴールを譲る。イギリス支配の始まりで、一九四七年のスリランカ独立まで続く。一八七一年、大型外航船に便利なコロンボ港が完成して、繁栄がコロンボに奪われた後でも、南部地域の中心として、ゴールは茶、ゴム、コブラなど、地方産物の輸出港として機能し続けた。インドからの米穀、各種カラー材料、その他食料品も多く輸入された。チェティヤー(Chettiyar)が活躍した。

このような港湾機能にもとづく商業活動によつてゴール市街は形成されたが、この都市の拡大には、イギリス時代に展開した都市後背地の産業が大きな役割を果たしてきた。茶、ゴム、コブラなどのプランテーション農業である。市街から農村に出かけると、これら産業による土地利用が明瞭にみてとれる。家屋が密に連なる商店街を抜け、樹木に囲まれた住宅地を越えると、突然、ぱっと視界が広がる。水田地帯で、一段と土地が低く、水が滞留し易い。地図で見ると、水田地帯はほぼ海岸線に平行に何条もの帯として描かれる。旧潟である。この水田地帯を横切ると茶プランテーション、あるいはゴム・プランテーションが丘陵斜面に広がる。すなわち、低い湿地が水田、高い台地が茶、ゴムのプランテーションである。椰子は海岸に近い土地に植えられる。椰子からコブラのほかに、綱の原料となる強靱な繊維もとれる。マットの原料ともなり、重要な輸出品である。ほかに、現在は廃れた黒鉛採掘場がかつて点在した。注目すべきは、もつとも重要な地方産物、茶とゴムが、いずれも歴史的に輸出を目的に栽培され、現在もすべて輸出

されることである。すなわち、台地上の農業生産とこの農業生産を基盤とする農業集落は、まったく植民地経済体制のもとで形成され、貿易関係の影響のもとに展開してきた。実際、これら商品の世界不況は、ただちに農村の賃銀労働者の雇用問題を深刻にした。多くの農民はプランテーションの賃銀労働者であったからである。農業も商業的色彩を強く帯びていた。歴史的に見れば農村での生産剰余が都市を形成させたのではなく、都市が媒介する商業活動が農村をつくった。しかし、後では、展開した農村のプランテーションが、交易活動が衰退したゴールの経済を支えることになる。米穀生産はまったく自給を目的としていたが、到底、プランテーションで働く労働者の需要を充たすことはなく、戦前では人口扶養に必要な量の三分の一にも達しなかった。多量の米穀がインドから輸入されていた。市街と台地上の集落を扶養するためである。植民地政府は排水事業によって水田面積の拡張に努めたが、米穀不足は変わらなかった。

一九八一年現在、ゴールの人口は七三、二三〇名で、一五の行政区に分かれて住む⁽⁸⁾。一九六三年の六五、二三六名に対して、約八、〇〇〇名の増加であるが、おおまかにみて、人口は停滞的であるといつてよい。農村から都市に向う人々⁽⁹⁾は、ゴールを通過して、むしろコロンボ、あるいは中央高地の諸都市に移住する。実際、コロンボでもその他の都市でも、ゴール出身の成功者、とくに商人は大勢いる。ゴール出身者の不屈の頑張り⁽¹⁰⁾と押し強さは、しばしば陰口の対象とすらなるようである。しかし、ゴールが人々の通過点であることには変りない。ゴールには増加する人口に対応できる就業機会はほとんどなく、近代工業の発達もごく限られているからである。市の人口を民族的にみると、シンハラ人(Sinhara) 五五、〇八六名(低地シンハラ人五四、七六〇名、高地シンハラ人三二六名)、ムスリム(Muslim) 一七、〇一四名、タミル人(Tamil) 八四六名(スリランカ・タミル人六七一名、インド・タミル人一七五

名)、マレー人七四名、バーガー七〇名、その他二一〇名である。シンハラ人が大多数を占めるが、第一の少数民族はムスリムである。ゴールは交易都市の歴史を反映する多民族・多言語の都市である。ムスリムの家庭内の会話はタミル語である。ムスリムはほとんど農村に住まず、都市に集中している。しかし、バーガーの大部分は、スリランカ独立後オーストラリアに移住してしまい、現在人口はごく少ない。タミル人の多くは限られた分野の商人である。

これらの人々の宗教構成はほぼ人口構成比に等しいが、少しのずれがある。仏教五四、〇七一名、イスラム一七、三一八名、ヒンドゥ八二四名、ローマ・カトリック七〇三名その他キリスト教二五六名、その他六〇名である。シンハラ人の大部分は仏教徒であるが、ローマ・カトリック、プロテスタントなど非仏教徒も若干いる。仏教は市街も農村も、どこにでも遍在するが、他宗教、すなわちイスラム、ローマ・カトリック、プロテスタント、ヒンドゥはほとんど市街が中心である。宗教の多様性もまた交易都市の歴史の反映であろう。宗教の違いは文化あるいは生活様式の相違でもある。

二、街のかたち

ゴール市街を歩いて、人々の活動の結果として形成された都市景観をみよう。ゴール市街をごく大まかに区分すると、海に突き出たフォート、海岸に沿って走る幹線国道の両側に軒を並べる商店街と公設市場、幹線国道の北側に迫る丘陵を下から上まで占める住宅地である。まずフォートからみてゆこう。⁽¹⁰⁾

フォートは、幹線国道から広いサッカー場(以前の遊歩道 Esplanade)を隔てて海に突き出る。明確に隔離された

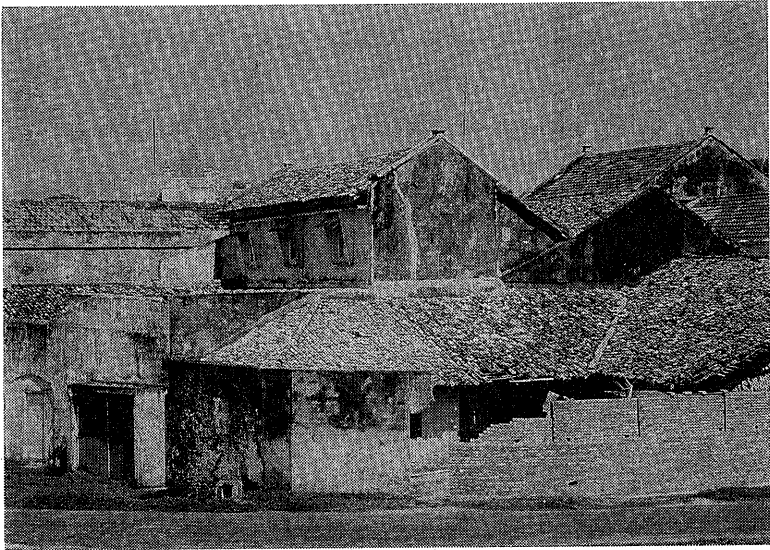
場所である。フォートに行くには、城壁下部をうがった新旧二つのゲートのどちらかをくぐらねばならない。ゲートとはいえ、奥行一〇メートル以上もあるトンネルである。旧ゲートはオランダの建設で、ゲート内側の壁上部に記念の石盾が残る。鶏頭で飾られた二頭のライオンで支えられるオランダ東インド会社の紋章である。ゴール(Galle)の地名起源説の一つはシンハラ語の「岩」を意味する「Galla」がラテン語 *gallus* 「鶏頭」と取り違えられた結果という。新ゲートはイギリス建設で、ライトハウス・ストリート(Light House Street)と直接繋ぎ、フォートの中央部を南北に貫通する。この二つのゲートによってのみ外部と連絡するフォート内部には、古い由緒ある建物がぎっしりと詰まり、時間の経過にともなつて、壁は汚れ、あるいは部分的にこわれてきている。しかしそれなりの美しさをも獲得していて、古い建物を見ながらの散歩が旅行者の大きな楽しみでもある。現在では政府の許可なしに、住民は自分の住居を建替えることができない。文化財保護である。

フォートのプランをみてゆこう。周囲を厚い城壁で固められたフォートは、地形条件に支配されながらも、道路網はおもに直線状であり、格子状を目ざす。人工的な一つの秩序を構成する。自然発生的な非定型と異なつて、明確にオランダ設計者の意志的な都市計画であることが示される。オランダ本国の古い中世都市のプランに似る。このオランダ都市建設は、現在の道路名にも残る。⁽¹¹⁾「Leyn Bann Street(Lijnbaan)-ropewalk」は、船を繋留するために使う太い綱を作る場所である。「Great and Small Moderabaay Street」「Moderabaay-Mud bay」は、古い地形状態を記憶する。「Lighthouse Street」は、かつての「Zeeburg Straat」で、以前、旧燈台が所在していた。「Church Street」は「Kerk Straat」で教会の所在を示し、「Peddlar's Street」も「Kramer Straat」で小売商人の居住地を示す。現在ムスリムがここに集住する。さらに興味深いオランダの遺産は下水溝のシステムである。フォート内部の

低地は海面下に相当するから、生活用水の排水は深刻な問題である。オランダ設計者は、この問題を汐の干満を利用する下水溝システムを建設して解決した。海面下の土地を干拓して、国土造成したオランダ本国の経験が生かされているといえよう。

いくつかの興味ある建物をみて歩こう。旧ゲートからすぐ右に昇る坂道、クイーン・ストリート (Queen Street) を歩く。坂の右側の土地登録局は、オランダ改革派教会の移転前建物。左側はウォーカー・アンド・サンズ (Walker and Son's) 会社、旧クイーン・ハウス (Queen House) であるこの建物の入り口に一六八三年とある石板の鶏の紋章がかかげられる。ゴール総督府であった。一八七三年、クラーク・アンド・スペンス (Clark and Spence) 会社に売却された。植民地政府はこの売却金で、ヌアラ・エリヤのクイーンズ・コテージ (Queen's Cottage) を建設した。スリランカ第一の港湾の地位をコロンボに奪われたゴールと、新興リゾート都市ヌワラ・エリヤの将来性を対比させる象徴的出来事である。以後、一九三六年、建物はウォーカー・アンド・サンズ会社に移譲した。三〇年代の不況の影響である。クイーン・ストリートを上って、チャーチ・ストリート (Church Street) との交差点は、フォートでもっとも高い土地で、一つの中心地である。

この交差点の東南角のウォーカー・アンド・サンズに対して、クイーン・ストリートをはさんで、古い鐘楼が立地する。一八世紀以来の歴史的遺構である。ウォーカー・アンド・サンズに対してチャーチ・ストリートをはさんでオール・セイントス教会 (All Saint's Church) が所在する。イギリス国教会に属する。礼拝堂の尖塔は際立って高く聳え、離れた城壁からもよく展望できる。興味あることに、この教会の祭壇は旧絞首台跡という。内部の敷石には墓銘碑が多く敷きつめられ、キリスト受難の輝くステンド・グラスが正面の高みから信者の座席を見下ろす。毎日曜、シ



オール・セイントズ教会遠望。海を背にして城壁に立つと、オール・セイントズ教会がひしめく屋根の上にそそりたつ。夕暮れ時には、白いモルタルが紅色に染まる。

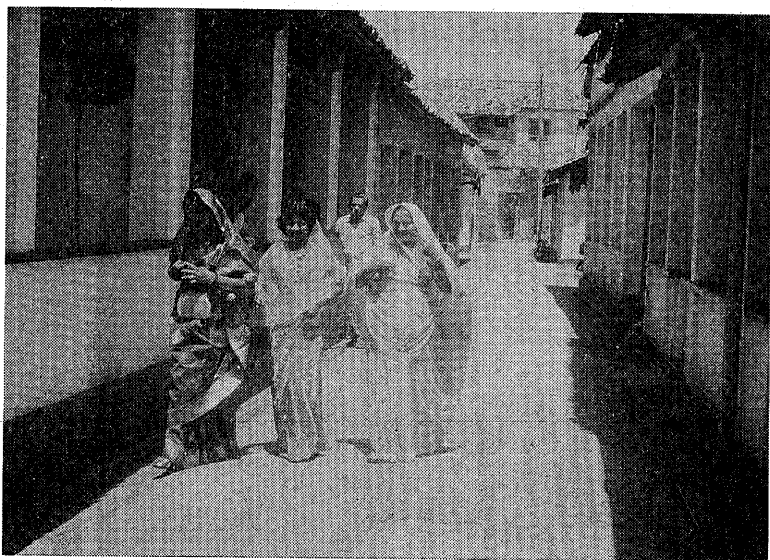
ンハラ語と英語のミサが行なわれる。とくにクリスマス
の夜には多くの人が集る。オール・セイントズ教会の隣り
はセイロン商業銀行 (Commercial Bank of Ceylon)
の大きなオランダ風建物である。一八六二年創立の旧商
業銀行 (Mercantile Bank) の後身である。ウオーカー
・アンド・サンズの筋向いは郵便局である。やはり古い
オランダ建築で、兵営として使われていた。ゴール地方
の郵便はすべてここを経由する。外国郵便も多い。ゴー
ル地方から諸外国に出かけて働く人々は多く、近年、と
くに中近東への出稼ぎが目立つ。男性は筋肉労働、女性
は家事労働である。郵便局に接してフオート図書館があ
る。稀観本の外に新聞、週刊誌などを常備する。この図
書館は会員制で、午休みに、近くで働く人が何人も来て
椅子に体をもたせて新聞・雑誌を楽しむ。図書館のすぐ
隣りがオランダ改革派教会 (Dutch Reformist) で、白
壁のオランダ破風が朝の光に照らされて美しい。大理石
墓銘碑を敷石とする。礼拝堂は人気がなく、静かな寂し



フォートの広場。広場の周辺に地方行政・司法の機能が集中する。人々は多様な手続き、訴えにここに来る。しかしなかなか時間をとるようである。午後は誰も居ないがらんとした空間となる。

さが支配する。喜捨を求める堂守の声も沈む。大勢のバーガーがオーストラリアに去った後、礼拝に来る信者はごく少ない。オランダ改革派教会とニュー・オリエンタル・ホテルにはさまれて、ミドル・ストリート (Middle Street) が始まる。ライトハウス・ストリートを横切ると南側に女学校 (Southland Girl's School) が立地する。構内にウエズリー (Wesley) 派の礼拝堂があつて、道路からも美しい屋根に付く鐘楼が望まれる。この学校とミドルストリートをはさんで、オール・ソールズ学校 (All Souls College) が所在する。これらの学校には、フォート外部から多くの生徒が通学していて、午後過ぎには子供の下校を待つ人々が道路脇の日陰に沢山あふれる。菓子類を売る人も来て、賑やかな光景が現われる。しかし夕方はすっかり静かで、道路を吹き抜ける海風の涼を求める人を見かけるのみである。ミドル・ストリートを通ってランパート・ストリート (Rampart Street) に突き当たる

と、現在の兵舎があり、いつも門番が立つ。午前中、駆足で訓練している兵隊達を見かける。兵舎に近い城壁の下は、岩盤を波しぶきが洗っている。ここにムスリムの聖所である真水の湧き出る泉がある。このように海水に没しそうな場所に真水があることはまさに奇跡とされ、バッテリー聖人の名にちなんで、バッテリーの泉と名づけられている。子供を欲しいと願う女性の信仰を集めてきた。青くきらきら光る海を見渡しながら、ラン・パート・ストリートの坂を下って南に向くと、左手に仏教寺院が所在する。一八八九年建立とあるが、古いポルトガル教会の跡地という。普通の仏教寺院とは相違して、外観とくに屋根には教会風の趣がある。いつも満月の日の夕方は、多くの熱心な信者が供物をもってきて祈る。この日はホーヤ・デイ (Hoya Day) といって、国家の休日でもある。フォートのもう一つの中心地は、さきのクイーン・ストリートの坂を下り、旧ゲート前を通り過ぎてすぐ右手の広場である。広場の北側に大木が聳える。拡がる木陰に格好のベンチがあり、よく何人かが腰かけている。菓子売りもいる。月曜から金曜までの午前中、多くの人々がこの広場に来て、あちこちで何人かが屯ろして話しにふける。かつてジプシーのような旅芸人が立寄り、蛇使い、手相見など、面白い見世物で楽しませてくれたという。広場の東側に地方裁判所 (District Court)、西側に簡易裁判所 (Magistrate Court) が所在し、旧警察署もここにあった。さらに地方裁判所の右隣りは地方役場である。これらの建物はいずれもオランダ支配時代からのもので太い列柱と白いくすんだ壁が特徴的である、いかにも時代がかっている。地方役場は旧オランダ軍病院で、道路の名前は現在でも、ホスピタル・ストリート (Hospital Street) である。地方役場のすぐ後ろは海で、二階から深い藍色の輝く海を越えて街をみる眺めは素晴らしい。役場は訪れる多くの人々で混み合う。とくに地方大臣 (District Minister) の部屋の前は大変である。地方大臣は選挙で選ばれる国会議員でもある。就職の世話から結婚式のスピーチまで頼まれる。地方長官 (Government Agent) の部



フォートの路地。狭い路地の両側にオランダ風を受け継ぐベランダを持つ家々が並ぶ。ベランダは貴重な日陰で、寛ぎの場でもある。樹木は中庭に植えられるが、フォート全体としては緑は大変乏しい。

屋は二階のもつとも見晴らしのよい場所にある。地方長官は政府任命の官僚で、この地方に対する国家権力の代表者であり、助役その他の役人の部屋にはない威厳が漂う。ホスピタル・ストリートは一九四〇年建設の新燈台につきあたって右に折れる。ここは旧ユトレヒト砲台跡である。近くの弾薬庫跡には不法占居者が住みつき、観光客にコイン、貝などいかにもいかがわしい感じの古物をしっこく売りつける。燈台の斜め向いに白亜の豪華なモスクが所在する。かつてのポルトガル礼拝堂の跡地とされ、一九〇九年の建築である。毎週金曜日に多勢のムスリムが礼拝に来る。近くにはムスリムのカリッジ (Arabic College) も所在する。道路のあちこちに山羊がのんびりと歩き、城壁と道路の間の草地には何頭もの牛が寝そべる。すべてムスリムの人々の所有である。東西に横切るペドラー・ストリートを始めとして、フォートにはムスリムが多数居住する。狭い道路にベンツなど各種自動車が増車する

かたわらを、二の腕を衣服で隠したムスリム女性が、牛車で外出する。二、三人で道路を濶歩していく女性も多い。ペドラー・ストリートの南にある小路はムーア (Moor) 道路という。彼等は住居をフォートにもち、商売は他所で行なう。完全な職住分離である。

フォートを一巡して気付くことは、第一に、オランダ支配、さらにはイギリス支配時代につくられた建物の大部分が現在も使用されていること。使用目的の変更、あるいは所有者の移転が時代の推移を物語る。しかし、オランダイギリスの影響は、都市プラン、建物の建築様式として現在に残る。個人住宅についても、道路に面してベランダを取り、奥行のある長方形のプランが多い。居間の向こうには中庭も設けられる。天井も高い。かつてオランダ人が建築し、現在はムスリムが居住している。

第二に、ムスリムが多いこと。独自の容貌と服装は、シンハラ人とは異なるコミュニティーの存在を示す。ムスリム・コミュニティーは、オランダ支配以前にさかのぼる。彼等の大部分は商人、とくに宝石商で、コロンプさらには海外で商売をしてきた。フォートは留守宅である。しかし、祭りには各地から親戚縁者が集まる。互いに訪問して、賑やかになる。互いの社会関係の拡がりが確認される。彼等の商業活動の基盤となる社会関係でもある。

第三に、シンハラ人口のいちじるしい増加。とくに昼間人口。官庁、会社の出勤者、学校の生徒の大部分はシンハラ人である。朝、七時半頃から九時にかけて、続々と大勢の人々が新旧二つのゲートをくぐって出勤してくる。しかし現在では、シンハラ人のフォートでの住居も増して、夜間人口もシンハラ人は多い。地方役場の統計では、フォート人口二、五二五名であり、ムスリム九四四名に対し、シンハラ人は一、五二一名である。明らかに過半を越える人口数であるが、フォートの実感にそぐわないとしてこの統計数字に疑義をもつ人々もいる。統計数字の信頼度はとも

かくとして、現在、シンハラ人が多く居住していることは間違いない。かつてオランダ支配下、シンハラ人にとって、フォートは近づき難い場所であった。シンハラ人居住地とは無人の広大な湿地を隔ててフォートは所在した。深い堀、つりあげ橋、見上げる城壁とその上に鎮座する三基の砲台は充分に威圧的であった。フォート内部の居住者は支配者であるオランダ人、後ではイギリス人と、ムスリムであった。いずれも異なる文化を所有する異人である。すなわちシンハラ人にとってフォートは海に突き出た異郷にほかならなかった。したがって現在みられる多数のシンハラ人は異郷の日常化過程とみる事ができよう。このシンハラ化過程において、住宅地としてのフォートは他の住宅地より高い社会的評価が与えられた。フォートに住むことが一つの身分表示になりえた。ムスリムについても同じ事情がある。他地区のムスリムより社会的にすぐれているという自負を、フォートのムスリムはもつ。

第四に、商店街が立地していない。ペドラー・ストリートの二、三軒の小さな雑貨店とチャーチ・ストリートの協同組合直営店だけである。ほかに観光客相手のムスリムの目立たない宝石店。鮮魚のリヤカーによる行商はあるが、住民は生鮮食料品、その他生活必需品のほとんどを、フォートの外部で購買せねばならない。外国との交易関係で展開したフォートの歴史の結果である。バザールは城壁の外部に形成された。外国との交易はフォート内部で行なわれたのに対して、生活に必要な生鮮食料品の売買はフォートの外部でなされたのである。商業の二形態、すなわち対外的な商業と対内的商業の区別は場所的にも明確に分けられていた。商店街は形成されなかったが、しかし外国人相手の宿泊設備はフォートに集中していて、さきのホテルのほかに何軒もの快適なゲスト・ハウス (Guest House) が若い外国人客を待つ。朝食付きの安い民宿である。かつてゴール港最盛期の一九世紀、中国あるいはオーストラリアを往復する船舶の寄港地として、七百人もの客が滞在したという。東西交易の重要な中継地であった。しかし現在、商店

街がないことで、昼下りの人通りの少ない道路は何か気だるい雰囲気になる。頭上からの無慈悲な太陽は白いモルタル塗りの外壁に反射して、道行く人に容赦なく襲いかかる。多くの家で、人々はしばしの午睡の一刻を過す。

フォートから旧ゲートをくぐって、商店街に向う。旧ゲートを出て、すぐ右手に旧埠頭が古い建物の背後に所在する。三〇年代までは輸出入に相当の活気を見せていたが、現在、錆びた大きな鎖が意味もなく投げ出されているだけである。無意味さが不気味な感じさえ与える。道路の名前は現在でもカスタム・ストリート (Custom Street) という。道の両側の旧倉庫はオランダ支配以来であり、城壁内部の倉庫とともに、かつては主要なオランダ輸出品のシナモンが集荷された場所である。旧埠頭の北側に接して小さな砂浜があり、何そうもの小型帆船が引き揚げられている。朝六時から七時にかけて、漁から帰る船を浜に引き揚げ、威勢のよいせりが行なわれる。ここで多くの魚行商人は安く仕入れる。青い光る海に浮ぶ帆船は絵のような風景であるが、風向きと潮の流れを熟知した経験と体力が必要な労働であろう。伝統的にカラバ・カースト (Karava Caste) の職業である。海と反対側は見上げる城壁であるが、城壁が切れると、視界はぱっと広がり、広大な旧遊歩場、すなわち現在のサッカー場である。サッカー場の向こうに幹線国道が走る。

フォートのもう一つの出入口、新ゲートをくぐると、すぐ右手はサッカー場、左手は残された遊歩場である。草丈二〇センチもない短い雑草が生い茂り、ぶらぶらするに適わしい。遊歩場の端はオランダ水路 (Dutch Canal) で区切られる。オランダ遺産の一つで、現在は、市街の生活用水の排水路として機能する。水路にかかる木製の橋はバターライ・ブリッジ (Butterfly Bridge) と名付けられ、人々に親しまれる。水路中ほどの橋脚を支点として、いかに蝶が羽根を拡げた優美な形態をなす。橋上に立って、海から打寄せてくる波を眺める楽しみは格別である。橋を渡

るとダルマパパーラ (Dharmapala) 公園で、戦前、ビクトリア・パーク (Victoria Park) といい、一八八九年に開設された。ダルマパパーラはスリランカ・ナシヨナリズムの推進者の名前による。公園はイギリス支配の遺産で、ゴールただ一つの公園である。公園の西隣りにタウン・ホール (Town Hall) が所在する。市役所と市議会がおさまる二階建ての大きな立派な建物で、一九五六年、建設された。市議会は、イギリス支配下、一八六七年以来、存続している。以前、フォートの地方役場内にあった。タウン・ホールは広い前庭を介して幹線国道に面する。

ゴール商店街の大部分は、コロンボよりマータラに伸びる幹線国道に沿って直線状に立地する。この道路より一区画南は海岸通りで海に面し、一区画北は住宅街となる。この幹線道路はメイン・ストリート (Main Street) でもっとも人通りが多い。人間だけではない。荷物をつけた牛車、バス、トラック、自動車、バイク、自転車など、各種各様の車が交通する。これだけ混雑していて、交通事故はあまりない模様である。商店街をみるには、便宜的に幹線道路に沿って、コロンボに近い西部、中部、東部に分けると便利である。この地域区分と扱われる商品がよく対応するからである。西部からみてゆこう。

右手に椰子の樹間から、濃い藍色の海、打ち寄せる波をみて、左手、国立ゴール病院を過ぎると、ぼつぼつ商店があらわれ、道路の両側に商店が連なるようになる。気をつけてみると、どの商店も非常に似ている。外国人観光客を相手にする土産物店である。通りかかる外国人に対する客引きも相当に大変である。ひやかして眺めていると、たちまち店内に引込まれられてしまう。宝石、金細工装身具、アンティーク、コプラ大王の仮面などを扱う。アンティークは中国、オランダ、日本の陶磁器、コイン、時計など雑多であるが、陶磁器がもっとも目立つ。皿が多い。ゴール周辺だけでなく、各地から集められる。外国との交易が盛んであったことを物語る。店主に皿について聞くと、右手

指で皿をパチンと弾き、本物という。音でわかるそうである。自宅に日本の古伊万里があるから見に来いという店もある。客はほとんど外国人である。しかし金細工装身具をおもに商う店には、地元シンハラ人の客が多い。結婚式に花嫁は必ず金細工の首飾りを着けねばならないからである。金の指環の交換もある。興味あることに、タミル人の店は金細工装身具だけを専門的に扱い、ムスリムは宝石を専門的に扱いながら、金細工装身具をも手がけている。シンハラ人の商店はほとんどない。

これら店舗が並ぶ中に、ヒンドウ寺院があり、ムルガン神を祀る。古い寺院で、チエティア協会が一九九〇年に建設した。チエティアはきわめて敬虔なヒンドウ教徒で、毎朝夕、寺院に詣でる。日常の質素な生活にもかかわらず、ヒンドウの祭りには多額の出費をして盛大に祝った。寺院を含む一区画は家屋の内部が通路で相互に繋り、あたかも大きな一軒家のようなものである。この一区画をキッタング(Kitang)という。店舗の奥に中庭があり、さらに住居と続く。中庭には井戸も設備されていて、タミル人が何家族も居住している。キッタングには金細工装身具店が六軒も同居しているが、まったく別々の経営である。しかしキッタングは全体として寺院の所有であり、店舗の家賃は寺院の費用に当てられる。毎年、七月から八月にかけて賑やかな祭りがあり、三キロほど離れたウナワトナ(Unawana)の海辺に所在するヒンドウ寺院に華やかな行列が繰り出すが、現在は民族問題の深刻化で祭りも困難である。寺院が所有する純金のムルガン像も襲撃を恐れて、銀行に保管する。実際、一九八三年の都市暴動では、キッタングは非常に緊張した。暴徒の襲撃を免れるために、軍隊が出動して、警備に当らねばならなかった。この暴動騒ぎのあとでも、いつも二名の兵隊が道路を巡回して、警備している状態が続く。

金細工装身具・宝石で特徴づけられる西部商店街の並びがとぎれると、右手にさきのタウン・ホールが見え、左手

はゴール刑務所である。刑務所はタウン・ホールのちょうど正面に位置する。門には銃を持つ兵隊が屯する。イギリス支配下で設置されて以来、そのまま利用されている。刑務所設置当時、この場所はゴールはずれに位置していたであろう。しかし、街の拡張につれて、街中の立地になってしまった。西部商店街は外国人観光客の増加にともなって発達した新興商業地域である。刑務所はすぐ東隣りの空き地を隔ててゴール鉄道駅に接する。駅前には時代物のタクシーが客を待つ。客席に座ると車体の床が抜けるのではないかと気になる。一八九四年、コロンボからの鉄道が開通した。鉄道以前はもっぱら馬車であった。早朝、五時に出発して、夕方四時から四時半頃コロンボに到着した。⁽¹³⁾現在、鉄道所要時間は約三時間。日本製のディーゼル機関車が使われているが、客車は相当に古く、座席も固い。進行中の揺れも激しい。しかし修理不十分なあなほこの道路を思いきりとばす自動車よりは、たしかに安全である。

駅のプラットフォームがオランダ水路沿いに平行していることを見ながら、石橋を渡る。このあたりには傘とか靴の修理屋が、炎天下の歩道の隅で、日傘がつくる陰の下でうずくまるように、黙って仕事をしている。石橋を渡ると右手がさきのサッカー場、左手がバス・ターミナルである。とても大きなターミナルで、ゴールのバス路線はすべてここを中心とする。赤塗りの大型バスはすべて輸入品で、現在は大変いたんでいる。走行中、座っていても何回か跳び上がりそうになる。座席の鉄枠が露出している車もある。しかし料金はとても安く、人々の生活に不可欠である。人混みのバス・ターミナルでは、ケーキ、飴など菓子類を、売子が人々の間を縫って、声をはりあげて売り歩く。停車中のバスにも入りこむ。物乞いは喜捨を求めて動き廻る。

バス・ターミナルに面して、ずらりと食べ物屋が並ぶ。パン、ケーキ類と紅茶、コーヒーを出す店である。清涼飲料水の店もある。どの店も若い人々で混む。ゴールの人はあまり外食を好まないようで、一般に食べ物屋の数は限ら

れる。しかしバス・ターミナル前は相當な繁盛である。近年、スリランカ風の中国料理店も一軒開かれた。これら食べ物屋と並んで食料品店、文房具店、クリニック、私設馬券売り場があり、路上では国营富みくじもよく売れる。交通の中心ということで、近年、盛り場的な雰囲気を少しもちはじめた場所である。

バス・ターミナルを過ぎると、すぐ左手にゴール警察署が立地する。以前、フォートの旧ゲート近くにあったが、現在地の新庁舎に移転した。警察のかたわらを、ワクベラ (Wackwella) 道路が幹線国道より北に岐れる。ゴールの住宅地を結ぶ主要道路である。警察署の東隣りが建設中の新ゴール郵便局である。画期的に大きな建物で、新人の研修センターも含まれるという。この建設地は旧オランダ墓地である。オランダ墓地はタルポット (Tahot) 道路にも一部あるが、残りはこの建設地に所在していた。建設にともなつて、墓石の一部はフォートのオランダ改革派教会内部の敷石と敷地に移され、他の一部はダダラの共同墓地に移されたという。さきの国立ゴール病院の西に位置する広大な市営墓地である。オランダ支配当時、この旧オランダ墓地あたりはフォートに対して境界地であつた。一六四〇年頃と推定される地図では、バザールはこの辺から旧市場にかけて位置する。地図には魚をぶつ切にする図が描かれて⁽¹⁴⁾いる。したがつて墓地と市場は接していたと推定できよう。

新郵便局の建物の前では、いつも路上商人が並んで、露天で雑貨などを商う。プラスチックのコップ、ガラス器具、衣料品などである。路上商人の隣りに、ブラック店舗が並ぶ。衣料品、靴が多いが、なかには自転車修理、靴修繕、自動車教習を看板にするなど、相當に多彩である。限られたスペースの中部商店街に新規参入はすでに困難であるから、中部商店街に接する場所で、さしあたって商売を始めるよりほかない。これらブラック店舗の出現は、低所得者層の需要にもよく応えているようにみえる。客の出入りは相當によい。ブラック店舗が並ぶ地点で幹線道路は二

つに岐れ、一方は古くからのメイン・ストリートである。この道路一帯がバザールと呼ばれる。他は海岸に沿う新しいシー・ストリート(Sea Street)である。新建設のバイパスでゴールを通過して南のマーケットラに向う車は、速度を落とすことなく走ってゆく。シー・ストリートは、さきのメイン・ストリートに面する商店街の裏側を走る。この幹線国道との分岐点にはライオン像が露天に立つ。ライオンはスリランカ国家の象徴である。中部商店街はここからである。中部商店街の特徴は、まさに多種多様な近代工業製品で、現代のゴール商店街の主要部分を構成する。なかでも人気の高い商品が、電気器具と衣料品である。ファンシー・グッズ(Fancy Goods)も、とくに若い女性には大変な人気である。メイン・ストリートを歩くと、いろいろな店舗が目につく。二階建てが多い。二階は多く倉庫に使われる。店の名前を大きな看板にして掲げたり、商品のブランド名をぶら下げたり、様々で賑やかである。

メイン・ストリートの店舗を眺めながら歩くと、いくつか路地がメイン・ストリートに対して垂直に分岐しているのに気付く。東に歩いて、すぐ左に入る路地はタルボット・クロス(Talbot Cross)道路で、道路の先はオランダ墓地の前を通って、さきのワクベラ道路に連なる。タルボット・クロス道路にも洋服生地屋、床屋、ラジオ修理屋が並ぶが、メイン・ストリートのような人通りはない。以前、この道路界限はゴールの悪所で、女を置いている家もあったという。道路から出るのを人に見られなくなかったといわれる。事情はまったく変わったが、それでもメイン・ストリートとは異なった雰囲気はある。私設馬券売場が奥まった道路角にあって、午前中から、何の職業かわからないような若い男が出たり入ったりする。

メイン・ストリートを右に入る路地は短く、すぐシー・ストリートに繋る。シー・ストリートに面して、すなわちメイン・ストリートのちょうど裏側に肉市場が立地する。牛肉が独特の匂いを発散させて、ぶらさがり、売子が道行

く人を大声で呼びとめて売りつける。売子にはキロ当り一ルピーの手数料が入る。相当に荒っぽい売り方である。客のほとんどはムスリムで、牛はすべてイスラムの儀礼に則して畜殺される。畜殺場はフォートに近い砂浜に立地し、隔離された場所という印象を与える。シンハラ人は肉食を好まず、肉市場の前を歩いて、肉のぶら下がる内部を見ないようにする。

肉市場を路地と隔てて新市場 (New Market) がある。新市場といっても、一八八〇年設立ですでに古びている。家賃、月一二五ルピーを市役所に納める。店はすべて道路に面する。果物、野菜を見ながら、道路を立ち止まりして歩く。各種バナナ、パイア、椰子、パッション・フルーツ、アボガド、マンゴーなど、新鮮な果物が店頭に積まれる。野菜も量は少ないがある。昼間はあまり客はないが、夕方には相当で、八時頃まで商う。シー・ストリートの照り返しがひどく、昼間は熱気に包まれる。市場前の共同水道の栓をひねって、売子は水浴びする。しかし夕方は、車で買いくる人が多く、商いも調子よい。車をもつ人々を相手に商売するから、新市場は品物の品質はよいが、値段が高いといわれる。

新市場からさらに路地を一つ隔てて、筋向かいに魚市場が立地する。大型のまぐろからいわしまで、魚の種類は多い。かつおをよく見かける。これら魚はカレーのよい材料で、大切な蛋白源となる。大きな包丁で輪切りにして、目方で売る。ここでも客に声をはり上げ、呼びとめて売る。魚市場近くの路上でも魚を大声を出して売っている。大きなかつおを何本も並べ、客が通ると、頭を下にしてぶら下げて見せる。この炎天下で魚がいたまないと心配になる。道路からの照り返しがきびしい。魚の道路上販売は違法行為といわれるが、いつも見られる。魚市場の近くには乾物店も四、五軒ある。米、カレー材料、椰子油、干魚、食料品を売る。鶏卵専門店まである。したがって食事の材料は



交差点の菩提樹。 右側に旧市場の入口。ゴールでももっとも賑やかな場所。しかし夜間は誰も居ない。危険な場所でもある。菩提樹の背後の空地で、年一度貧困者に対する食物の無料施与が行なわる。

何でも一通りそろってしまふことになる。

ふたたびメイン・ストリートに戻る。魚市場からの
曲り角は、煉瓦の外壁だけが残されたタミル人商店の
廢墟である。一九八三年の焼き打ち跡である。この廢
墟の向う側にムスリム商店が並ぶ。これらムスリム商
店も以前焼き打ちされた。現在はすっかり建替えられ
て、外道からは焼き打ちの出来事をうかがうことはで
きない。しかし人々の記憶にはまだはっきり刻まれて
いる。ある商店の看板に一八八二年創立とある。この
商店街の並びがこの頃かたちづくられたことを物語る。
メイン・ストリートをぶらぶら歩くと、ヒリンブレ
(Hirimbure) 通りの岐れに近づく。約四〇年前、ここ
がバス・ターミナルであった。交通量が増大して現在
地に移転した。分岐点にはオルコット (Olcott) の像
がたつ。道路はオルコット・ストリートともいう。米
人オルコットは、イギリス支配下のスリランカで仏教
興隆に尽力し、ゴールのマヒンダ・カレッヂ (Mahi-

nda College) の創設に力を尽くした。名門校の一つである。ヒリンブレ道路は、ゴール農村を繋ぐ幹線道路である。一般に、スリランカでは道の分岐点は危険な場所とされ、幽霊が出没し易い。菩提樹が植えられ、小祠が設けられる。この分岐点でも一本の大きな菩提樹が茂り、広がる木陰がバス停留所である。以前は別の大木が茂り、木陰に低カーストの芸能人がやってきて、人々を楽しませたという。菩提樹は聖なる樹木で、周囲に祭壇が設けられる。毎朝、きれいに掃除され、水が供えられる。この費用は、すぐ側らに所在する旧市場 (Old Market) の売場占有者の寄附金による。

旧市場は一八六九年開設である。長方形の建物を幹線国道に対して直交するように位置するから、旧市場は、幹線国道に沿うというより、むしろこの道路から引込んでいる印象を与える。建物のがっしりした太い列柱は、いかにも時代経過を感じさせる。人々が必要とするほとんどの野菜がここにある。アrika・ナット、ジャフナ・タバコ葉まである。屋根からぶら下がる裸電球の下で、大勢の人がぶつかるとして往き来する。客は男性が多い。売子は、一人の老女を除いて、すべて男性。五〇年前には、四、五人の女性売子がいたという。かんかん秤で野菜をキロ単位で売る。ここでも若い男の大きな声が値段の安さを叫ぶ。

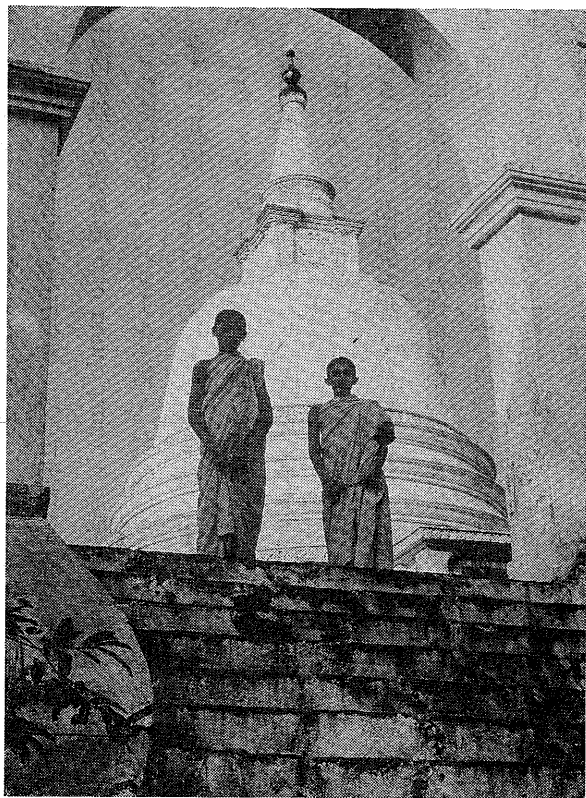
旧市場から東が東部商店街で、幹線道路とヒリンブレ道路の二つの街道に沿って商店は連なる。この商店街の特徴は乾物商である。米穀、カレー材料、干し魚、椰子油などの卸しと小売りをする。店頭に米のサンプル数種があり、農村の小売商が卸して購入する。小売りよりいくらか安い。クーリーに運ばせ、牛車で運搬する。広くない道路は、遠距離輸送のトラックと近距離輸送の牛車で一杯で埃っぽい。とくに午前中、店内は小売りと重なってひどい混みようである。乾物店にまじって、生菓の店がある。樹皮、草木の伝統薬で、中部商店街の医薬品店と対照をなす。ジャ

フナ・タバコ店も数軒ある。強烈な香りは路上にもただよう。大きなタバコ葉をそのままくるんで販売する。これら商店の並びにぼつんぼつんと食べ物店がある。パンを置くが、店内は薄暗く食器も汚れている。価格は安く、この近くで働くクーリー達が利用する。大きな家具店も目につく。家具店は西部と東部商店街だけである。店舗の裏の工場で製作する。注文生産もある。幹線国道に沿ってはやがて商店が少なくなり、大きな敷地の工場が離れてぼつんぼつんと立地する。茶プランテーション、精米所で使う機械類の製作、修理である。椰子油製油所、自動車会社、倉庫もある。やがてさきのシー・ストリートと合流して、道路は工場、新港湾への入り口を過ぎてマータラに向う。ヒリンブレ通りを少しゆくと、右手に煉瓦の廢墟をみる。八三年暴動の際、焼き打ちされたタミル人麻袋店の跡である。この時、住居を焼かれたタミル商店主もあった。八二年には、道路を隔てるムスリムの住居も焼かれたという。ムスリム肥料商の店舗も焼かれた。現在でも、兵隊二人が組になって道路を往きつ戻りつして巡回する。一見何もないようにみえて、底流には不穏な動きがあるのであるうか。商店も少なくなる。サラナンカラ (Saranankara) 道路との交差点をすぎて、道路は住宅街の中を走ってゆく。商店は四つ角などで、ごく小さな食料品店を見かけるだけになる。

商店街を一巡する散歩の最後は、週市 (Pola) である。週市はシー・ストリートと海岸の間に残された空き地に所在する。シー・ストリートより一メートルほど低い土地で、この落差は社会的評価にも関わる。七〇年代から始まった新しい市場である。以前、この広場の海よりの場所に身元不明の死体置場が設けられていた。シー・ストリートに接する西隅に今も聳える大木の拡がる木陰は、娯楽の乏しかった時、旅芸人が人々を楽しませた場所でもある。広場中央に二棟の外壁のない屋根と細い柱だけの市場施設がある。毎週末、ここで各種野菜がうず高く積みまれ、売りは懸命に声高に野菜の値段をはりあげて客を引きとめる。市場施設から離れて、炎天下に少しの野菜、果物を地面に直接

に置いて客を呼びとめる売子は、農村からの人々である。素焼きなべ、つぼの売場はシー・ストリート側である。台所にはかかせない調理道具である。近くで牛が寝そべって雑草を食べる。広場の西はしには乾物商が店を出す。魚市場に近い乾物店の出店である。東はしにはバラック店舗が並ぶ。食べ物店、時計修理店、洋服仕立店、衣料店、床屋、洗濯店などが軒を並べる。市有の店舗で月五〇ルピーを納める。営業のライセンス料は業種によるが、時計修理は月九〇ルピーである。私設馬券売り場まである。週市を中心とするこの広場は、ゴール商店街のミニ版の印象を与える。ゴール商店街を西から東に歩き、最後に週市にも立ち寄った。商店街の景観の特徴を二、三あげておこう。第一に、商店街が無人の境界地 (No man's land) で形成されたこと。さきの一六四〇年頃の図は、フォートから隔たったオランダ墓地に接して、バザールを描く。刑務所より西に位置する商店街は当時ない。刑務所は一九世紀における市街のはずれに位置した。いうまでもなく、現在の住宅地はまだ形成されてない。住宅地の発達は、一九世紀後半以後、茶、ゴム・プランテーションの発展を待たねばならなかった。すなわち、商店街は「諸共同体のはてる地」に立地した。現在でも、商店で働く人々、店主も売子もすべて夜間は住宅地にある自分の住居に帰り、家族と生活を共にする。商店街は無人の地と化する。スリランカの人々は、夜間、墓地の近くを通ることを非常に怖れる。悪霊につかれる心配である。夜間、商店街を歩く人はいない。

第二に、ゴール商店街と週市を中心とする広場の類似。両者とも無人の境界地に立地した。オランダ墓地と死体置場に関わる土地である。ついで、生鮮食料品の商いが最初にあり、他の諸商業が付随して展開した。さらに、フォートに対してゴール商店街は一段低く見られたように、ゴール商店街に対して、広場のバラック店舗は一段と低い。くわえてゴール商店街のはずれの菩提樹は広場西南隅の旅芸人の大木に対応する。前者は信仰の対照で人々は無事息災

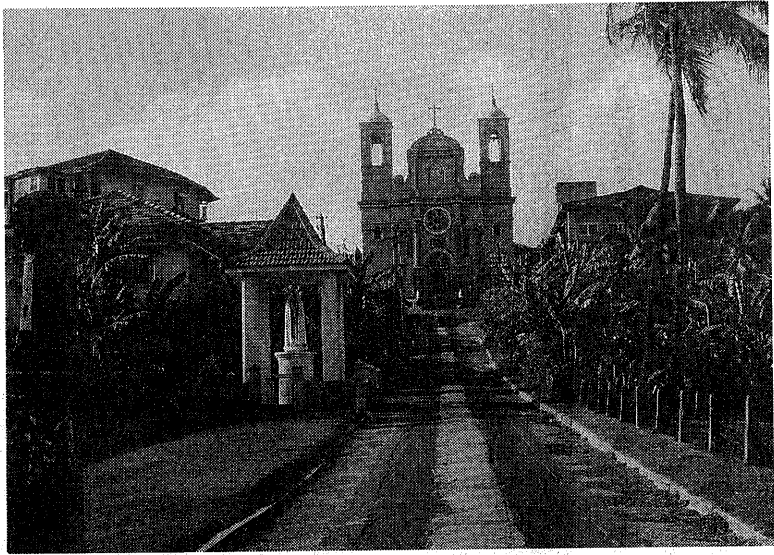


仏教寺院。丘陵上にある寺院の境内は静寂な雰囲気であられ、眼下の住宅地とは明確に異なる次元にあることを感じさせる。人々の喜捨によって寺院は建立される。

成のモデルである。しかし、七〇年代のスリランカ社会の市場経済の発展は、週市の広場は都市の中の未完の都市である。細工装身具店出現にまで到達していない。いわば、週市の広場は都市の中の未完の都市である。

第三に、商業活動の地域分化がある。商品からみれば、西部は金細工装身具、中部は近代工業製品、東部は米穀・乾物、とそれぞれ特徴づけられる。商業形態では、フォートの商業が外国との貿易をも含む近代的株式会社であるの

を祈願する。後者は楽しみみの場で、人々は時にやってくる旅芸人のパフォーマンスに興じる。商店街の菩提樹の前身も大木で、旅芸人の場であった。しかし多くの類似点にもかかわらず、決定的な相違もある。広場には金細工装身具店がないことである。都市と農村を商品の視点から区別する指標は、日常生活ではなんの機能もない金細工装身具店である。すなわち、週市を中心とする広場は、ゴール商店街形



セント・メアリー教会。刑務所のすぐ西に接する丘陵上に立地。眼下の西部商店街からは、息をきらせて登る急坂上にある。ゴール西端のランド・マークであった。すぐ近くにセント・アロイスアス・カリッジを従える。

に対して、商店街はゴール地域をおもな対象とする個人あるいは親族営業である。さらに、東部商店街では卸業が大きく目立つ。これら商業活動に対して、生鮮食料品を扱う公設市場はまったく異なる。幹線国道の裏側、少しひっこんだ立地、隔てられた土地が選ばれる。このような商業活動の地域分化も都市ゴール形成の歴史を物語る。多様な商業活動相互の間の社会的差異性が、地域の差異性をつくりだした。しかもこれら差異性を維持することで、全体として重層的な商業活動の場、都市ゴールが形成される。分化した地域性はゴール社会での社会的威信の秩序にも深く関与する。フォートはすでに見たから、商店街のすぐ北側に位置する丘陵と、丘陵と丘陵の間を縫うようにしてある谷に立地する住宅地を歩こう。

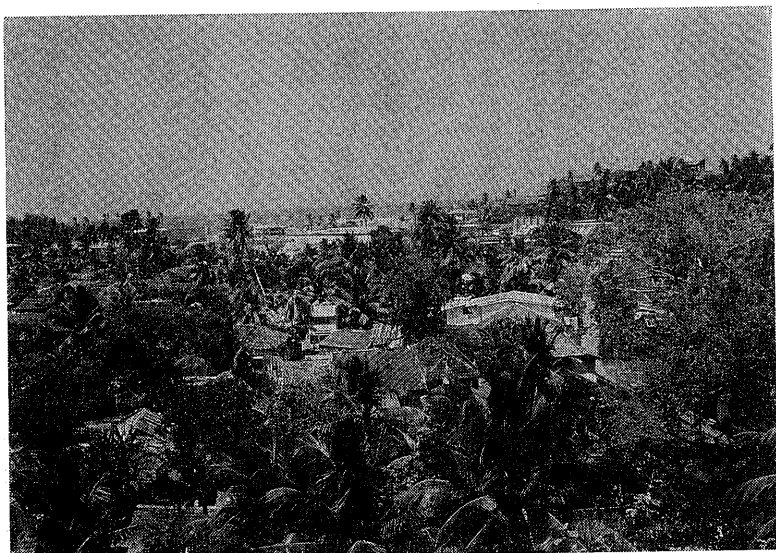
商店街を一巡した後、住宅地についても簡単にみておきたい。商店街で働く人、買い物する人々の居住地である。旧市場背後の丘陵にアップパー・デイクソン



カンデワタ・モスク。 リッチモンド道路とカンデワタ道路の交差点近くに位置し、モスク路地に面する。ムスリムの大きな集落があり、祭りで大変に賑う。

多くが仏教寺院で占められる。ローマ・カトリック教会も同様で、西部商店街背後の丘陵上にセント・メアリー (St. Mary) 教会、一八七六年建設が立地する。平日でも熱心な信者がマリア像の下に額かずく。眼下に刑務所を見下ろし、かなたにフォート、さらにインド洋と展望を自由にする。モスクの立地とはまったく対照的である。モスクはごみごみした場所にあつて、多くは道路の交差点に近い。ムスリムのおもな職業が商業活動に関わることと重ね合わせ

(Upper Dixon) 道路が通じる。もつとも富裕な、あるいは社会的威信をもつ人々が住む。頂上には地方長官公邸がある。大変見晴らしがよい。晴れた日にスリランカ第一の聖地アダムス・ピーク (Adams Peak) も望めるといふ。ゴールでは、海岸に向つて丘陵が伸び、いくつもの谷がこれらの間をくねくねと曲折する。したがつて、小山状の丘陵が多く見られる。大変興味あることに、これら丘陵頂上の



樹海の中の住宅地。丘陵斜面に立地する住宅にはさまざまな樹木が植えられる。繁茂する自然の中に人々の生活は包まれ、農村の延長上にある。フォートの住居とはまったく対照的である。

て、興味深い立地である。モスクの周辺にはムスリム集落の形成がある。モスクの豪華さのていどは、周辺のムスリムの経済的富裕に多く関わるようである。

丘陵頂上の立地を好むもう一つの建物は学校である。ゴールの三名門校、リッチモンド (Richmond College)、マヒンダ、セント・アロシヤス (St. Aloysius College) はいずれも丘陵頂上に所在する。イギリス支配以来の学校、多くのすぐれた人々を育てた。子供達の社会的栄達を願って、親はこれら学校に彼等を入れた。宗教は来世まで含めた人間の全存在に、教育は現世での栄達という相違はあるが、両者ともに現状からの向上を目指すことでは類似する。実際、教育には高い社会的評価が与えられ、高いていどの教育を受けた人間はそれなりの高い社会的威信を享受する。どこそこ学校の出身であることを人はよく口にする。リッチモンドとセント・アロシヤスはキリスト教、マヒンダは仏教の普及を目的として創設された。これ

ら名門校卒業生はゴールに限らず、コロンボでも広く活躍する。宗教の相違は何も関与しない。現在はすべて私立校から国立校に変わった。しかし教育に対する社会的評価には変らない。新しく制定された学区制による制限をくぐるために、リッチモンド周辺に土地を求めると、このため地価が上ったという。リッチモンドの礼拝堂裏手の坂道をいくつもの校舎を眺めながら登ると、頂上に校長官舎がある。ここから谷を隔てて向う側同じ高さに、仏教寺院がよく望まれる。

住宅地は丘陵頂上から下の谷にいたる斜面に不規則に拡がる。谷の多くはバス道路である。家屋の周辺はバナナ、パイナップル、マンゴー、椰子など有用果実の樹木、雑木で囲まれる。丘陵頂上から見下ろすと、樹木の葉陰におおわれて、家々はほとんど見ええない。一面の樹海が海にまで続く。このような住宅地の景観はメイン・ストリートのすぐ近くまで繰返す。すなわち、ゴール商店街を呑み込みそうに自然は繁茂する。フォートと対照的である。フォートの城壁と城壁前の広場は自然を明確に斥ける。ゴール商店街からローアー・ディクソン (Lower Dixon) 道路にかかると、一見、山間の集落に入った印象がある。メイン・ストリートからわずか二百メートルほどの距離に過ぎないが、深い木々の縁に包まれた景観の只中に居て驚く。ゴム・プランテーションから安く集めてきた古いゴム樹を小さくして薪を束ねる人に出会う。街に売りに行くという。まるで山村の趣きである。ローアー・ディクソン道路をどンドン登って、地方長官公邸の下方を越えると、クリプス (Cripps) 道路に出会う。この辺は金細工職人が多い。薄暗い室内で一人あるいは何人かの職人が仕事している。主人のもとに住み込みあるいは通いの職人が働く。ゴール商店街では、すでにカーストと職業の一義的な結びつきは弱まり、多くの場合、商人の出身カーストを直ちに知ることとは難しい。しかし住宅地では少し事情が異なる。カーストによる住居の住み分けがあるていどはつきりとみられるからである。

たしかに、農村におけるような明確な住み分けではなく、現在、相当にカースト間の混住も経済変化にともなうて進んでいる。しかしなお、住宅地を聞くだけで出身カーストをおおよそ推定できるほどである。たとえば金細工職人(Nawandanna)は一つのカーストを構成して、広く集落を形成する。ほかにも椰子砂糖づくり(Wahumpua)、床屋(Panikki)、漁師(Karava)、椰子ロープ作り(Saragama)、楽士(Berava)、星占い(Oli)のカースト集落がある。じぼ作り(Kumbhal)、洗濯(Dhoby)もそれぞれ一つのカーストである。さらに、カーストではないが、社会分業の展開をたどるうえでムスリムの宝石研磨も重要である。宝石研磨はムスリムだけの職業で、市街の特定のいくつかの地域に集中して、宝石のカッティングと研磨を行なう。住居のかたわらの仕事小屋で職人達が原石を磨いている。近代的な動力研磨機の導入も相当に進んでいる。床屋はゴール商店街に店舗をもつが、金細工職人、ムスリム職人は、一部はゴール商店街あるいはコロンボ商人、外国商人と直接に取り引きする。一人の職人が何人かの職人を雇う。同一人物が職人と商人を兼ねる。職人の商人化といってもよい。外国人観光客の増加が一つの契機であった。成功した商人は大変立派な家屋を建築し、事業の規模を拡大している。商人が職人を抱える場合もある。黒壇(Ehony)の工芸品も同様で、沢山の象の土産物を職人が製作している。仕事場は住宅の一部である。ゴール商店街の商人とは異なつて、完全な職住一致である。

同一カースト集落、ムスリム集落の中での貧富の差が大であることは、家屋の建築、室内調度品であるていど示される。カラー・テレビ、電気冷蔵庫を楽しむ家からあまり離れていないにもかかわらず、いまだ電線が引かれていない地域も少なくない。部屋は薄暗く、昼でもランプが必要でないかとみえる。床は土間で、病人は黙ってむしろの上に横たわっている。国家の生活保護を受けていても、生活が苦しいことには変りはない。しかも子供が非常に多く、

隣近所の子供達もわいわい言ってやってくる。富裕な家では家人の数も少なく、客は家に入る前に番犬が危険でないかどうか確かめねばならない。いうまでもなく、このような貧富の差は、直接にゴール商店街での買い物に反映する。特定の店舗との顧客関係、購入する商品がもつ社会的威信を表示する力などである。誰もが了解しているが、それとしては眼に見えない社会階層が商店街における人々の行為として可視化される。いわば住宅地を日常性とすれば、商店街は人々のパフォーマンスの場、晴れの舞台と見ることができよう。商店街に買物に出かける時、人々は身仕度を整え、髪の手入れをしていく。

ゴールの住宅地を歩くには、地名がよい手引きとなる。土地の地形的特徴、社会的性格、伝承が地名として表現されている。すなわち人々の土地に対する働きかけが地名として社会的に記憶される。人々の働きかけは直接的な身体性を帯びて言語化されている。住宅地を通る主要道路を一周して、いくつかの地名をみておこう。⁽¹⁵⁾

さきにみた幹線国道から分岐するワクベラ道路に沿ってゆこう。ワクベラは河川の湾曲の土手を意味し、さきにもたギン川が湾曲してつくる土手に、ワクベラ道路は到る。ワクベラ道路が幹線国道から分かれてすぐ、左手がチャイナ・ガーデン (China Garden)。丘陵前面の低地である。フォート前面のかつての沼沢地に連なる。イギリス支配下、フォートに駐在するイギリス軍隊に供給するため、中国人を連れて来て、野菜を栽培させた。現在は中国人は二人しか居ない。一人は戦前から居住していて、かつて衣料の行商をしていたが、今は理髪店を経営している。もう一人は最近、移住してきた歯医者である。チャイナ・ガーデンの細い路地の奥にはモスクもある。特定カーストが集住しているのではなく、多様な人々が居住して、都市的な性格を強く持つ土地である。家屋を圧倒するように繁茂する樹木にも乏しい。ワクベラ道路をはさんで、右手はウェリワタ (Weliwata)。Weli は砂、Wata は特定の土地であるか

ら、砂地の土地を意味する。ワクベラ道路を北上して鉄道線路を越えると、左手にカンデワタ (Kandawatta) の丘陵がある。Kande は高地であるから、カンデワタは高地に所在する土地である。しかしモスクは丘陵麓に立地し、リッチモンド道路に沿って富裕なムスリム宝石商が居住する。カンデワタの丘陵はガルワダゴダ (Galwadugoda) に連なる。Gal は石、Wada は職人、Goda は人々が集まる集落であるから、ガルワダゴダは石を扱う職人の村である。実際、ガルワダゴダ一帯は貴金属細工職人など金属を加工する職人の集落である。ほかに商人となってコロンボで貴金属装身具を扱う人々、自動車修理工になっている人々も居住する。再びワクベラ道路に戻って、北に向う。右にサンガミッタ (Sangamitta) 女学校を見てゆく。この国に仏教を招来したマヒンダの妹に由来する。女学校の裏手の急坂を登ると仏教寺院で、フォートまで自由に眺望できる。一面の樹海の上に、太陽光線を白く眩しく反射する海がある。美しく鮮やかに境内を彩るブーゲンビリアの木陰の向こうに、小さな鐘が円柱に下がる。一八八二年ダラスゴとある。フォートに居住したイギリス人の寄贈によるのであろう。ここから男子名門校の一つ、マヒンダ・カレッジはあまり遠くない。ベッケ貯水地 (Becke Reservoir) も遠くない。Becke は、イギリス時代この貯水地建設に関わった技術者 Becke による。ゴールの水道水の水源である。ベッケ貯水地からワクベラ道路に戻ると、すぐにジュルガン (Jugaha) 交差点である。Jul はウッドアップル (Woodapple)、Gaha は樹木であるから、ジュルガハはウッドアップルのある交差点である。ウッドアップルのジュースに椰子砂糖をくわえたデザートは、酸味がよく利いて大変美味である。交差点すぐわきに水田があり、近くの人が小作しているという。コロンボ幹線国道から三キロほどの距離である。この交差点を左折すればリッチモンド・カレッジも所在するクンバルベラ (Kumbalwe-lla) である。Kumbal は素焼きのつぼ作り、Walla は線状の土地である。

右折すればダンゲデラ (Dangedera) である。Dan は喜捨、布施、Cedera は家屋であるから、ダンゲデラは布施を行なう家屋が所在する土地であったことを意味する。ワクベラ道路を直進すれば、右手に二〇エーカーものゴム・プランテーションが丘陵の上に向っているのを見る。ゴムの向こうにシナモンもある。やがてカレガナ交差点にいたる。ゴール市の行政上の境界である。交差点の中央に大きな菩提樹が茂り、仏陀の小祠が設けられる。かたわらに少し見えにくい水がめ (Pintale) がある。ピントアレは「布施の水」で、積善を意味する。旅する人に無償で水を与えた。

カレガナには二つの地名伝承がある。一つは、Kale は真鍮のつぼ、Gana は彫刻であり、カレガナは彫刻をした真鍮のつぼである。かつて王妃の強い望みで彫刻を施した真鍮のつぼを作ったが、このつぼ作りがここに住んでいたという。もう一つは、Gana は打つこと。したがって、カレガナは真鍮のつぼをたたくことである。オランダ時代、シナモンを運輸するための水路を建設した。この建設に多くの作業員を動員したが、作業の開始と終了を告げるために真鍮のつぼをたたいたという。ゴールが経験した二つの歴史、すなわち在来的支配と外来的な支配が重層して地名伝承として残されたのであろう。

カレガナ交差点を左折すれば、ボーベ (Bope) を経て、ダダーラを通過してコロンボ幹線国道に出る。Bope の Bo は菩提樹、Pe は麓であり、ボーベのほぼ中央に菩提樹がそびえる。周辺の低地は水田であり、ゴール市内ではあるが、農業集落の景観に類似する。カレガナ交差点を右折すれば、ヒリンブレ (Hirimbure) を経て、ラブドマ (Labuduwa) でゴール市外に出る。ヒリンブレには二つの説がある。一つは Hirin 囚人で、Bure 保護地である。かつて囚人をゴールに護送する際に、この土地でしばらく留置したことに由来する。もう一つは Hirin 石灰岩、Bure 石

板である。地下の石灰岩の石板のおかげで、井戸水が豊かに供給できたという。さらにラブドアは、Labu 南瓜、Duwa 低地にある小高い丘陵、である。低湿地に島状に位置する小丘陵で、南瓜が栽培されていた。南瓜はカレーによく使われ、大変おいしい。

ヒリンブレで右折すれば、ダンゲデラ、タラピティヤ (Talapitya) を経て、さきにみたオルコット像の立地するメイン・ストリートに出る。Talapitya は、Tala 蚊を斥ける草、Pitya 小さな土地である。丘陵から下りた低地にタラピティヤは位置する。ムスリムが多く集住し、モスクとムスリム墓地も所在する。タラピティヤと水路を隔てて位置するメーゴール (Magelle) は、Ma は大きい、Galle は岩石である。メーゴールには漁業関係者が多く住む。

地名を手がかりに住宅地を一周した。二、三興味あることを述べておこう。第一に、コロンボ幹線国道に近い低地と丘陵の多くは、低いカーストあるいはムスリムの集落である。支配カーストのゴイガマ (Goyigama) の集落はむしろ国道からずっと離れる。すなわち海に近い土地には低いカーストとムスリムが住み、遠く隔たる土地は支配カーストが居住する。かつて伝統的には支配カースト、ゴガイガマは農耕を生業とした。ゴイガマにとって、陸は身近な馴染みある世界であるが、海は不気味な存在であり、他所者あるいは外国人が現われる場にほかならなかった。他所者は漁業、椰子の繊維加工、鍛冶あるいは占星、芸能など非農耕を生業とする低カーストである。外国人は商業活動をした。いかえれば、ゴールの伝統的な社会分業は地理的な分業として空間的に表現されていた。いわばゴールの原型といってよいであろう。いうまでもなく、この原型は具体的な歴史条件によって多様に変態していく。

第二に、土地の高低についてである。さきにみたように、多くの仏教寺院は丘陵上の立地を好む。対照的に、ムスリムの聖所は、さきにみたように、陸でもあり海でもあるような限界的な低地に立地していた。住居にも似た傾向が

あり、地方長官公邸はアッパー・ディクソン道路の最高点に位置する。人々は長官公邸よりの展望の素晴らしさを、あたかも自分の家からの眺めのように自慢する。長官公邸の近くに富裕な人々の住居が位置する。裁判所判事の官舎もこの近くである。少し離れたローアー・ディクソン道路から少し登った頂上には中央の地理調査局 (Survey Department) のゴール支所が立地する。イギリス時代からの建物である。政府関係の建物は、あたかも丘陵上からゴール全体を見下し、支配しているようである。地方長官公邸は、人々の住居立地に対する理想の実現、いわば「住居の中の住居」、理想住居としてみる事ができよう。最近でもガルワダゴタでは、コロンボで蓄財して、住居を山腹より頂上に移転した例がある。

第三に、商業活動の立地についてである。メイン・ストリートの商店街は、海岸に接する低地、すなわち丘陵が海に向って果てる地点に立地する。陸によって構成される世界の果ての境界である。実際、夜ともなれば、まったくの無人の土地である。しかし昼間は商業活動は盛んで、多くの人々が集まり、ゴールの一つの中心となる。昼と夜の規則的交代によって、地理的な中心と境界は動態的に変動する。祭りと日常との交代によって社会が活気づくに類似えて、商店街はゴールを活気づける。さらに商業活動と祭りの類似をみたが、商店街は祭りの空間化といえよう。商業地は住宅地と対立することで、両者は補完関係にある。伝統的に商業活動を担ったムスリムは低地に居住し、モスクを低地に建設した。仏教寺院が丘陵上に立地することとはまったく対照的である。境界に立地する商業活動の原型は、具体的な歴史条件としての経済発展によって多様な現実として現われる。一九七〇年代の経済発展によって、メイン・ストリートよりも境界性の強い週市が出現した。海にすぐ接する、かつての死体置場区の近くにである。メイン・ストリートよりも内陸に向った土地でも、雑貨店は多くバス通りの交差点近くに立地する。一つの丘陵の果てであり、

他の土地へ移行する地点に相当する。境界を帯びた立地であることには変わりない。

最後にフォートも含めて、ゴール景観の全体像をまとめておきたい。さきに見たようにフォートは陸地より特異に海に突出した土地に立地する。広大なサッカー場と遊歩場が低湿地であった当時では、まさに海上に浮ぶ岩石の島であった。事実、現代でも、さきに見た丘陵上からの眺望は、樹海のゴールと城壁で遮断されたフォートの対比を明確にする。いわばフォートは「都市の中の都市」である。逆説的であるが、都市は社会の中で外部性を担った場所であるからこそ、社会の中心となる可能性をもつ。歴史的にフォートはゴールの中心であった。さきのゴールの地理的原型が在来的な社会分業にもとづく社会階層の秩序を表現するとすれば、フォートは外来的にゴールを支配する。水平的統合というより、むしろ垂直的支配である。フォートの地理的外部性は政治統合の権力の外部性を示す。フォートとゴールの地理的に水平な超越性の位置関係は、政治統合レベルでは垂直的な超越的位置関係に変換する。フォートの中心である地方役場を人格的に表現する地方長官の公邸は、アッパー・ディクソン道路の最高点に所在する。水平的な外部性が垂直的な外部性に対応している。政治権力の外部性がゴールに内部化されているのである。この内部化過程は樹海のゴールの形成でもある。すなわち、都市の影響によって、在来の集落が拡大した。いわば農村集落の延長上に樹海のゴールは位置づけられる。さらにゴールの祭りにも政治権力の内部化を確かめる場面がある。ゴールでもっとも重要な祭り、五月のウエサク・ホーヤ (Weak Hoya) である。仏陀の誕生、悟り、入寂の日を記念する祭りである。旧市場かたわらの菩提樹の裏手の空き地を会場として、貧困者に対して食物の施与が行なわれる。この儀式に地方長官は招かれ、挨拶する。政治権力の正当化とともに、土着化が図られる。海に突き出たフォートと丘陵を主体としたゴールが旧市場で一体となつて、一つのゴール世界が描かれる。しかし、外部性を強くもつ場所も社会

の中に統合されれば、外部性は社会内部の境界性を帯びた場所に変換する。フォートは現在でもゴール市でもっとも境界的で対外的に開かれた土地である。

海のフォートと陸のゴールの関係は商業活動でも再現される。フォートは対外的な交易活動、ゴールは対内的な生鮮食料品の市場にそれぞれ特化しながら、両者は歴史的に一定の關係性をもってきた。さきにもれた商業活動の二形態である。外部性の商業活動が内部化される過程で、歴史的に行商、週市、常設市、商店街が出現した。これら商業活動がゴールの都市景観を形成する営力として作用した。そこで以下商業活動の諸類型を土地別に具体的にみてゆきたい。

- 1 スリランカに所在するオランダ建設のフォートについては、ネルソンが要領をえて便利である。すべてのフォートを紹介する。W. A. Nelson, *The Dutch Forts of Sri Lanka The Military Monuments of Ceylon*, Canogate, Edinburgh, 1984.
- 2 TAKASHI TOMOSUGI, *The Structural Analysis of Thai Economic History*, Institute of Developing Economies, Tokyo, 1980, pp. 71.
- 3 人間の相互交渉による社会關係の形成、さらに社会關係の安定化としての社会制度に関する、バーガー、ルックマンの論説を参照。対象化は Objectivation, 沈殿化は Sedimentation である。後述の日常生活と象徴世界の関連性についてもバーガー、ルックマンを参照。Peter Berger and Thomas Luckmann, *The Social Construction of Reality*, Allen, London, 1971.
- 4 商品は経済的有用性ととともに、象徴的価値を担う。拙稿「商品の系譜」青木保・黒田悦子編『儀礼——文化の形式性に関する研究』東京大学出版会、一九八七年予定所収。
- 5 フランスの事例による研究であるが、ベルセは大変に興味深い。Y・M・ベルセ井上幸治監訳『祭りと叛乱 16〜18世紀の

民衆意識』新評論 一九八〇年

6 注4を参照。

7 ヨール年表について、左記文献を利用。K.D. Paranavithana, "Galle, The City that the Dutch always admired" in *Journal Netherlands Alumni Association of Sri Lanka*, No. 4, 1981 pp. 18-24.

A.H.A. Sany, "Chronology of Some Historical Events" in *Centennial Volume of the Galle Municipal Council*, by Galle Municipal Council, 1967.

8 一九八一年人口統計はすべて地方役場統計課による。

9 A.H.A. Sany "Galle Some Useful Facts" in *Centennial Volume of the Galle Municipal Council*, by Galle Municipal Council, 1967.

10 フォートについては次の文献を利用。ロバーツはバンフレットであるが、ヨール在住であるだけに、記述の信頼度は高く、有益である。プロヒビア (1981) はオランダがスリランカに残した影響を記述するが、ヨールに関わる部分もいくつもある。プロヒビア (1978) は紀行文の形式をとって、スリランカ各地の歴史風俗を紹介。ヨールについてもまとまった記述がみられる。外国人観察者によるヨールに関する古い記述もいくつもあり、いずれも貴重である。ここでは、パーシバルをあげる。しかし、パーシバルの中で、ヨールがインドに干魚を輸出していると述べているが、現在はどこに対しても干魚の輸出はまったくない。むしろ輸入が多い。一九世紀を通してヨールに起こった経済変化をうかがわせる。シュルターダーはオランダ総督で、一七六二年の後任者への覚書き。スリランカ各地の記事を含むが、ヨールに関する報告もある。たとえば、バザール、チエティアー、ムスリムに対する課税を言及。サーも興味深く、第一章はすべてヨールに当てられる。まさにセイロンはヨールから始まる。前掲の *Centennial Volume* もフォートに関する有用な記事を含む。

Norah Roberts, *Welcome to Galle, Galle*. (undated)

ヨール (Galle) スリランカ一地方商業都市の肖像 (一)

- R.L. Brohier, *Links between Sri Lanka and The Netherlands*
A Book of Dutch Ceylon Netherlands Alumni Association of Sri Lanka, 1978.
- R.L. Brohier, *Seeing Ceylon*, Lake House, 1981, pp. 150-158.
- Galle Municipal Council, *Centennial Volume of the Galle Municipal Council*, 1967.
- Robert Percival, *An Account of the Island of Ceylon*, Tisara Prakasakayo
 1975 (first edition 1903), pp. 99-100.
- Jan Schreuder, *Memoir 1762 Selections from the Dutch Records of the Ceylon Government*, No. 5, tr. by E. Reimers,
 Colombo, 1946.
- Henry Charles Sirtt, *Ceylon and The Cingalese*, Swarna Hansa Foundation, 1984 (first edition 1850) pp. 1-13.
- 11 報告書の de Vos 参照。F.H.de Vos, "Old Galle" in *Journal of the Dutch Burger Union of Ceylon*, sep. 1908,
 No. 3, p. 136.
- 12 ヤン・トロイミン・カラムシの田舎村の描き。キタンギの記述を参照。L. Ramanathan, "The Kitangi" in *The*
Aloysian, 1938-39, Vol. 4.
- 13 Henry Charles Sirtt, *Ceylon and the Cingalese*, Swarna Hansa Foundation, 1984, p. 14
- 14 A. Brohier, op. cit., 1978, p. 44.
- 15 Bandusena Gunasekara, *The Names of the Galle's Villages and its Descriptions*, Gunasena, Colombo, 1975 (ハンク
 ラ語) コーラの地名は「ヤン・トロイミン」の文献による。Bernard P.S. Fernando 氏が必要部分を英訳していただき、小稿では利用。